

# 小田原史談

第180号  
発行所 小田原史談会  
小田原市栄町2-13-20  
アオキ画廊内TEL(24)0637

## 岩太郎川 昔と今

市川 一郎

はじめに

曾我山を水源とする川は皆急流なので、石まじりの土砂を運んで来て、平地に広い扇状地を造っている。この土地が梅に適しているので広く植えられており、中河原梅林は神奈川県観光五十選に入っている。

毎年二月梅花のかおり豊かなころ「曾我の里歴史散歩の会」では「梅の里むかし展」を開いている。

昔のこと

平成十年(元次)二月、この催しの際、友人の大山正雄氏から岩太郎橋近くにある供養塔の事を聞かれたが、思い出せないで同行して現場に行った。

舞戸部落から新道を横切り、だらだら坂を下り、岩太郎川の手前の右側に写真①のような供養塔に次のような文字がほられていた。

〔正面〕

白車ひくべからず

橋供養塔

寛政七舍龍乙卯

六月十七

願主 当村中

石工 □□□□



①橋供養塔

〔裏面〕  
橋供養施人

下曾我村

長谷川文右衛門

明治廿八年一月建之

久野村

石工 杉崎勝太郎

〔白ぐるま〕と橋

餅つき白の材料はおもに「ケヤキ」で、松も一部使われていた。大きな物は、長さ八十cmぐらい、直径九十cm、高さ八十cmであった。この両端に太くて長いクギを打ち、竹をヒモにして、運んでいるのを筆者は見ただ覚えがある。

橋は、川の上に太い木を二、三本わたし、上に松や杉の木を横にならべ、その上に松や杉の小枝をしき、上に土や砂利をのせたものである。昔の橋は土橋なので、古くなると、重い物を載せるとこわれるので注意したのであろう。

供養塔が立てられたわけ

この塔が立てられた「いきさつ」

を二、三の老人に聞いたが知っている人は無かった。

一 供養塔の前の文字

天明二年(一七六二)M七の地震があり、小田原城が破損し、箱根、大山、富士山で山くずれがあった(理科年表)。この地震で曾我山にもたくさんの山くずれがあつたと思われる。

岩太郎川の本流は曾我山で二番目に高い仙元山の下から流れ出ている。両側が岩や砂でできた崖のような急な勾配を、八〇〇mぐらい流れると、左岸が開けて四〇〇mぐらいの間が、田園の水源となり集落に入つてすぐ曲沢川と合流している。

寛政二年(一七五七)の地震でくずれ

た岩石が、寛政七年(一七九二)かそれ

以前に、土石流となつて非常な勢いで流れおち、橋をこわしたので、新

しく橋をかけかえし、流れた橋の冥福(死んだ人の幸い)を祈つて、供養

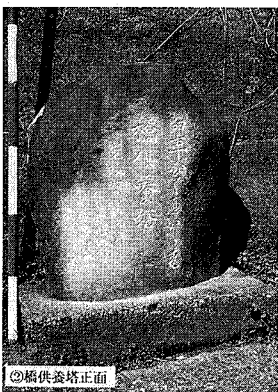
塔を立てたのであろう。

二 供養塔のうしろの文字

十年一昔と言う「たとえ」がある

ように、明治年間の出来事は昔話の

内に入る。曾我谷津の長谷川文右衛門氏(宗我神社の正面の道を登り、左側



②橋供養塔正面



③橋供養塔裏面





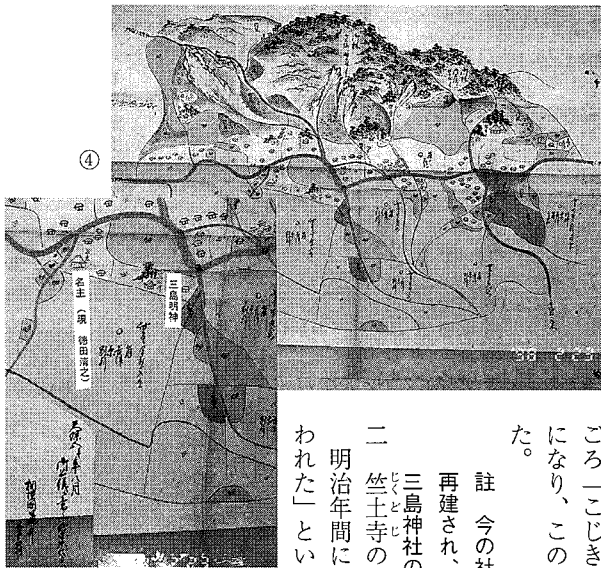
の大きな屋敷の四代前の人)が、各所の土橋を石橋に取り替えたので、その時書き込んだのであろう。

註 長谷川氏が「かけかえ」た橋のうち、どこかの橋を新しくした時、取り外した幅四十m、高さ二十m、長さ二mぐらいの竿石が、下曽我駅前「梅の里センター」の入り口に置いてある。

岩太郎川の流域

本流の上流部は前記のとおりで、中程は生活用水となり、下流は稲作りの水となつてその他の川とともに、森戸川に流入している。

支流の曲沢川は俗に「赤田境」と言う、字「牧ヶ尾」(俗称まさきやま)を源流とし、字「竹之内」と字「上舞



戸)の境で本流に合流する。

判明している被害  
明治以前

一 三島明神  
鎌倉山の中腹にあるこのお宮は、上曽我自治会にある天保五年(一八五四)に公儀(幕府)にさしだした絵図(写真④)には、上曽我公民館とJ.R御殿場線の中間で、現在三島神社跡地と伝えられている上曽我三五〇番地イ、ロにあった。

その後岩太郎川の水害で流されたので今の場所に移つたが、その時期は不明である。子供のころお宮を建てた時、お金を寄付した人の名前と金額を書いた板が「かべ」に取り付けてあったが、昭和四〇年(一九六五)ごろ「こじき」が泊まっていた火事になり、この板も無くなつてしまつた。

註 今の社は昭和四十二年(一九六七)再建され、御神体は静岡県三島市の三島神社の御分体である。

二 竺土寺の災害

明治年間に大雨があり、お寺が「こわれた」という言い伝えはあるが、「こまかい」ことは判らない。

註 明治三十五年(一九〇〇)九月二十八日大雨と「大津波」があり、海水が田島の森戸(大形農道がJ.R御殿場線を横断するあたり)ま

で押しよせて来たので、その時かと思われる。

三 岩太郎川の大水

筆者は、明治四十三年(一九〇八)頃、今の岩太郎橋の上側(図二)あたりの川中に一・五mぐらいの大きな石が二つあり、道から石の上に乗って遊んだが石屋が来て割ってしまった。

昭和以後

一 昭和四年(一九一九)の災害

この時上流にも被害があったが省略する。図二に示すようにニカ所です手がこわれ、上曽我公民館は写真⑤のように被害を受け、水はJ.R御殿場線(以下線路)が土手となり湖水のようになった。

二 昭和十年(一九二五)の災害

この時は雨量が多く、上流では字「唐沢」「大谷津」で山林がくずれおちた写真⑥⑦でその一部を紹介す



⑤昭和4年の水害上曽我公民館

る。また公民館の上で土手をこわし、さらに鳥居正三氏宅を写真⑧のようにこわし、下流して前回と同様線路を土手として湖水のようにした、また上曽我踏切(図二)では線路が流されたので枕木を使って写真⑩のように仮工事をして開通した。



⑦昭和10年の大谷津の水害



⑩昭和10年の水害(唐沢堤上の流木)



⑧昭和10年公民館北隣鳥居正三氏の水害



⑨昭和10年の水害竹之内共同水車



⑩御殿場線の仮工事 枕木を積み重ねて施工する。真ん中の穴は水路



⑪圃場整備のため岩太郎川堤防の樹木切り取り

### 三 支流の曲沢川

この川は、合流点の少し上であふれ、用水ぞいの共同水車を写真⑨のようにうずめ、下って線路上の側を湖水のようにしたが、あふれて線路をこわしたので、図二、写真⑩のように仮工事をして開通した。

#### 線路上の側に

#### 水のたまるわけ

線路の両側を掘ってその土で線路を高くしたので、跡地は深い池になり、水草がおいしげり、小魚もいたが「ひる」がたくさんいてなやまされた。なぜかここを「フケ」と言った。

この水は上からくる小川の所で、線路下にうめられた七五cmぐらいの土管で下流していたが、土管の中に

「どろ」がたまっていたので、大雨の時は流れきれないで湖水になった。  
岩太郎橋付近の  
道と川と橋事情

明治のはじめまでは岩太郎橋をわたり、竺土寺の前をまがり、上曾我バス停の所に行くのが普通であった。

明治二十四年(一九一〇)に里道が二間(三・六m)幅の県道になったが、橋から先は両側の竹藪が林のようにしげっていて、昼間も暗かったので軍隊意外はほとんど通らなかつた。昭和四年(一九二九)県道が三間(五・四m)に改修され、岩太郎橋は現在の所に移転し、橋から上曾我バス停まで直線になり、翌五年に富士急行のバスが開通した。

この工事で元県道と里道は、ほり



⑫崩壊寸前の岩太郎川堤防



⑬圃場整備の「田んぼ」をJR御殿場線町田踏み切りから見る

さげられ、岩太郎川は道端の溝を流れるようになり、川上の道路との連絡は写真①のように橋下を通るようになる。今でも大雨の時は道が川

橋の移転にともない道が下がったので、橋際にあつた供養塔も今の所に下がったのであろう。

その他

農薬が多用されるまでは田んぼでは、「どじょう・たにし・かえる・めだか」がとれ、麦の色づく頃は螢が川の付近でたくさん舞った。

最近のこと

平成五年(一九九三)に岩太郎川はじめ、付近の川の利用面積約四〇・七ヘクタールの圃場整備がはじまり、平成十年(一九九八)ほぼ完成した。

本工事で各河川の自然堤防はくずされた。その後自然堤防の姿を知りたくて各所を訪ねたが、資料は手に入らなかった。

たまたま大山正雄氏が関係資料をお持ちとのことを知り、同氏から堤防をこわす前後の写真⑪と⑫を借り受けたので一部を記載する。

曾我小学校と岩太郎川

曾我小学校は今年が創立百二十周年になるので、記念音楽会が計画され、六年生が岩太郎川とその周辺のことをとりあげ調査、研究した。その結果をホームページとしてインターネット上に開設した(小田原市教育研究所キッズシティ小学校曾我小ホームページ)。

「岩太郎川の歴史と自然」「子供たちの遊び」

子供たちは調べたことをもとに、岩太郎川について、次のような歌を作詩作曲した。

「忘れない悲しみ」 作曲 青英雄

- 一 洪水起こして家流し、米つく水車もつぶされた。激しく土砂を押し流し、人々恐れる岩太郎川
- 二 暴れる川で運ばれた、肥えた黒土で森ができ、田んぼに恵みをもたらした。命あふれる岩太郎川
- 三 コジユケイ鳴いてたあの森に、ブルドーザーやってきた。逃げ行く森の生き物の、命とだえた岩太郎川
- 四 川減れば土はかれ、森切られれば命さる。大切なもの失った。悲しみ忘れない岩太郎川

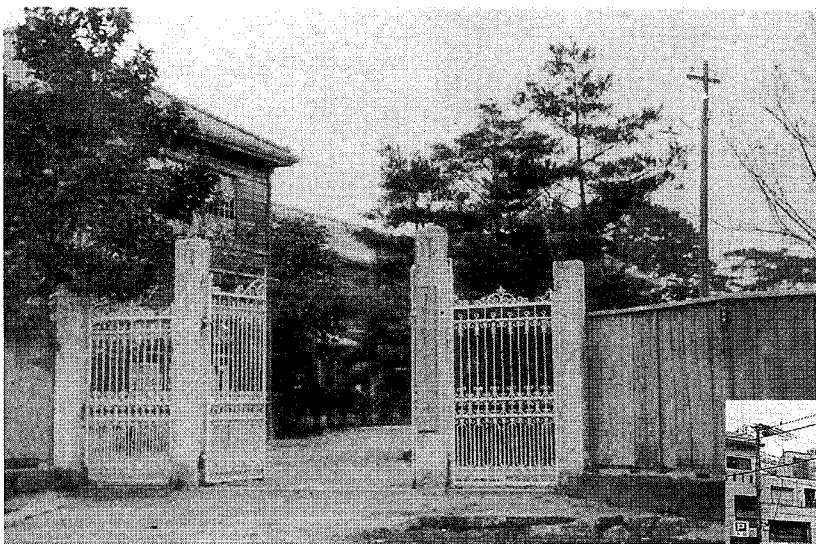
十一月二十七日の記念音楽会では、この歌や曾我について調べたことをもとにして作詩した「小さな小さな曾我だけど」が歌われた。

おわりに

本文を作るキツカケとなった供養塔との出会いと、失われた岩太郎川の写真を提供していただいた大山正雄様。キリのひとつぶのような小さな岩太郎川を海外で紹介して下さった曾我小学校の小林先生。曾祖父の広造が昭和四年、同十年の水害の時、治水工事の資料として、撮影した多くの写真を提供してくれた徳田清之君、その他助言をいただいた多くの方々にお礼を申し上げて筆を置く。

写真 今日

明治末か大正時代の小田原町立高等女学校正門



右手の写真版は、舗道拡張のため工事中の城址公園前市営有料駐車場である。現在は完成して利用されている。バックの建物は、小田原市民会館であるが、やがては取り壊されるであろう。それにしても、この駐車場が、小田原町立高等女学校(現・県立小田原城内高等学校)があった所だとは想像もつかない。写真版は、関東大地震のあった以前の建物で、明治末か大正初め頃のものだと推定される。ところで、その小田原城内高等学校も、2002年には県立小田原高等学校と統合することになっている。景観だけでなくに制度も組織も、時代と共にその変貌が目まぐるしい。(岡部忠夫)

# 酒匂史談 ②

さかわ

## 川瀬速雄

や石器土器の出  
土する相模西部  
の原住民遺跡の  
宝庫である。約

② 海洋よりの移住  
酒匂の地名の起源は『新編相模風土  
記稿』では、

1 日本武尊東征の折神酒を河  
にそ、ぎし時の酒の匂い説

2 河の流れ逆流説

3 地形弯曲説 佐田川の曲り  
部と云う地形説

が記されており、3の地形説ではな  
いかと説明されている。

私は、この地形説に加えて他地区  
より移住した民族の故郷名との複合  
された地名と解している。

酒匂の「匂」は私の小学生の頃は  
「匂」と書き、「匂」の古字は「匂」  
で即ち「ク」で、酒の音は「キ」で

ある。酒匂川の古名は、まり子川、  
または九子川で、酒匂部落の西と酒  
匂川との間に流れる川が菊川と考え  
る。菊川は曾我大沢より発した中々  
の大河であったが、酒匂堰その他の  
用水堰の掘鑿により現在の如き小河  
となったと思われる。

又、まり子川は現在の河川より西  
方を大きく弯曲して流れ、用水堰開  
鑿と前後して、酒匂川と云われるよ  
うになった。  
更に推測すれば酒の「キ」は紀州  
の「キ」に相通する。三世紀の頃、  
紀伊の人々が舟にて海岸線伝いに移  
住して来たのであろう。

古代の陸地は、ジャングルで通行  
が危険困難であったと思う。海路は  
今と大差なく比較的安全であっただ  
らう。海岸添いに東へ東へと移住し

### 二 酒匂のあけぼの

#### 1 先住民

何時の頃より酒匂に人が住むよう  
になったかは定かでないが、私の家  
敷を初め、中宿、横町、川端、中市  
場と処々より縄文式、弥生式と思わ  
れる土器片が出土した。

私は酒匂の原住民を、山岳地帯か  
らの移住と海洋より移住に依るもの  
と考察して見た。

#### ① 山岳地帯より移住

今より五千年～三千年昔の石器縄文  
土器時代、地球は最温暖期で、海岸  
線は、久野～足柄～山北～大井～曾  
我～国府津の山岳地帯でこの海岸沿  
いに人々は生活していた。この地区  
は衆知の通り堅穴住居、敷石住居跡

酒匂は、大河の河口で堆積土壌で  
格好の移住先であったらう。曾我病  
院附近、中里大同毛織工場の遺跡調  
査に山岳地帯で出土する土器石器よ  
りも新しい石器土器が農耕具と同時  
に発掘されたのは、原住民移動を物  
語るものであろう。

久野舟原二重遺跡や星山の住民  
は、多古、芦子方面へ。山北皆瀬川、  
足柄矢倉沢方面の住民は、松田、塚  
原へ。曾我城前寺、国府津山の住民  
は、小八幡、前川方面へ。大井山田  
屋敷、金子台の住民は、曾我光海、  
千代、中里へ、更に南下して酒匂へ  
と、移動したと思う。

### 「海路移住」裏付け

#### 小田原中里遺跡

土器 器くびれ部分に特徴



東日本最古の弥生大集落が見つ  
かった中里遺跡=小田原市で 平成12年11月

小田原の中里遺跡は、  
七世紀、弥生時代中期中葉  
(約西暦1000年)の弥生  
文化の遺跡である。この遺  
跡からは、土器の器くびれ  
部分に特徴的な凹みがある  
ことが確認された。これは、  
海路から移住した人々の  
文化の痕跡と見られる。こ  
の遺跡からは、土器の器く  
びれ部分に特徴的な凹み  
があることが確認された。  
これは、海路から移住した  
人々の文化の痕跡と見ら  
れる。この遺跡からは、土  
器の器くびれ部分に特徴  
的な凹みがあることが確  
認された。これは、海路  
から移住した人々の文化  
の痕跡と見られる。

平成10年11月 朝日新聞記事より

# 明治の書簡でつづる 相田軍曹と日清戦争(六)

## 無残、澎湖島の戦い

瀬戸長治

### 国府津停車場で面会を

(宛名)

東京麻布宮所第三聯隊 後備歩兵  
第一聯隊第八中隊第二小隊  
陸軍二等軍曹  
相田代吉様 御直披  
(差出人)

(文面)

神奈川県足柄下郡早川村  
杉崎甚五兵衛・林 為之  
明治廿八年一月三十日

厳寒の時下、先ず以テご清勝称賀奉  
り候。生ら幸ニ無事消光まかりあり  
候。憚りながらご遊慮下さるべく候。  
さて、其後は、ご無沙汰鳴謝(深く  
お詫びする)奉り候。ご家族ご一同  
ごぶじにござ候間、これまたご休神  
なさるべく候。  
陳者、本日、石橋村脇山伝吉氏二面  
会承り候ところ、貴兄および同氏モ、  
近々ご出征の由拝承、驚愕御事二存  
じ候。さりながら、国家のため、兼  
テノ御気性、ご名譽の亀鑑、程ナク  
拝聴のことと欣喜まかりあり候。  
就いては、定メテご出発の時期二ハ、  
国府津停車場二おいテ拝顔相得たく

切望まかりあり候間、右日時御分り  
次第御報下されたく、本郡兵事報勞  
会二おいテモ、必ス御見送りハ之あ  
り候ハ勿論ナレド、殊更、平素のご  
交誼ニより、是非とも面会仕りたく  
候段、ご了承下されたく、いずレご面  
会の節承り由し述べべく候えども、  
時節がらせつかく寒氣の障リナキ  
様、万々祈り奉り候。  
右、取りあえず国府津停車場ご通過  
の期日伺まで、かくの如く二御座候。

拝具

一月三十日午後

杉崎 林 拜

相田雅兄

\*当時、杉崎氏は村長の職にあつた  
模様。

### 面会后、家族無事帰着

(宛名)

東京麻布宮所第三聯隊  
後備歩兵第一聯隊第八中隊  
相田代吉殿  
(差出人)

相田磯吉

明治廿八年二月五日

《はがき》

はじめに

「相田家文書」について・相田家系・略図  
☆弥生館から浦賀へ

弥生館に復書(相田代吉より弟相田磯吉あて) 明治廿九年9月1日

無事入隊を祝し(磯吉より代吉あて) 9月5日

面会に参るべく(磯吉より代吉あて) 9月6日

馬車鉄道で無事帰着(磯吉より代吉あて) 9月10日

浦賀町駐留の兄(磯吉より代吉あて) 9月20日

駐留地移転の連絡(代吉より相田本家あて) 9月24日

慰問品の発送の知らせ(以上一七六号)

☆東京麻布第三聯隊

(東) 見物においで(代吉より妻あて) 9月28日

留守宅への指示(代吉より妻あて) 10月2日

前村長の死去(以上一七七号)

留守宅への札状(代吉より相田本家あて) 9月29日

兄代わて磯吉三浦郡・石井文吉あて

婦用洋服持参の依頼(磯吉より代吉あて)

☆東京麻布第三聯隊

(東) 見物においで(代吉より妻あて) 11月4日

留守宅への指示(代吉より妻あて) 11月26日

前村長の死去(以上一七八号)

留守宅への札状(代吉より相田本家あて) 12月20日

兄代わて磯吉三浦郡・石井文吉あて

婦用洋服持参の依頼(磯吉より代吉あて)

婦用申請書

(早川村外四カ村組合役場より代吉あて) 12月18日

海蔵寺住職の賀状(代吉あて) 明治廿八年1月2日

国府津停車場で面会を(以上一七九号)

(早川村杉崎甚五衛門・林為之より代吉あて) 1月30日

面会后、家族無事帰着(磯吉より代吉あて) 2月5日

七日十時の面会について(石田弥五平より代吉あて) 2月5日

☆廣島から澎湖島へ(以上本号)

出征の連絡(代吉より妻あて) 2月13日

話によれば台湾(代吉より妻あて) 2月23日

乗船の前に(代吉より相田本家あて) 3月5日

馬関(下関)港にて(代吉より相田本家あて) 3月8日

海軍の参戦(代吉より磯吉あて) 3月14日

敵艦に近接(代吉より磯吉あて) 3月21日

澎湖島の戦い(代吉より相田本家あて) 3月28日

熱病に犯され(第八中隊部下一同より磯吉あて) 4月14日

お梅さま(米村村磯石政吉より代吉妻へ) 4月30日

第八中隊長からの書簡(相田代吉あて) 5月1日

表彰状(足柄下郡兵事報勞會送) 9月26日

従軍記章之証(賞勲局総務) 11月18日

後備歩兵第一聯隊第八中隊  
相田代吉殿

(差出人)

小田原幸町四

石田弥五兵衛

(明治廿八年)

二月五日夜九時

投函

(文面)

\*面会場所は、東京麻布龍土第三聯  
隊宮所と思われる。  
七日、十時の面会について

五日ご面会みぎり失敬仕り候段、平  
にご面遊下されたく。さて、貴君儀  
もいよいよ清征ノタメ、明後七日夜  
十時発車ノ趣キ、依テハ、夜中故、  
皆々ご面会いたしかね候間、此の段  
悪しからずご容赦。

《はがき》

東京麻布宮所第三聯隊



くれぐれ申上げおき候通り、行く先々ニテ燭火ニテよろしき間、一々ご案内下されたく、必ズ願いたく。

然テハ、五日ご一言有とおり、国家ノタメ勢いよくご出発二つき、我ら共ニ於テモ、誠ニ恐祝の義ご候間、

御書  
先づ申上げ候通り、行く先々ニテ燭火ニテよろしき間、一々ご案内下されたく、必ズ願いたく。然テハ、五日ご一言有とおり、国家ノタメ勢いよくご出発二つき、我ら共ニ於テモ、誠ニ恐祝の義ご候間、

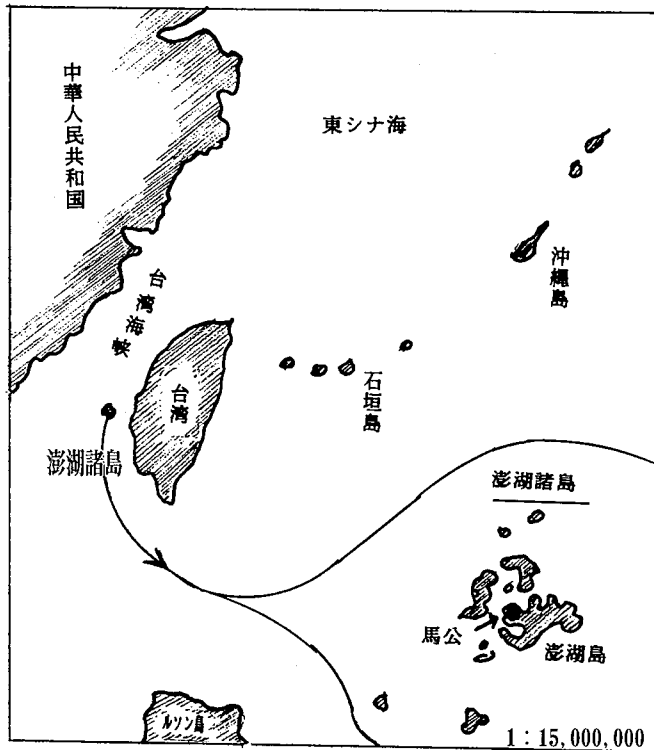
自分柄故、身体ご養生は専一二御座候也。

\*面会場所は他の書簡から、国府津停車場と思われる。

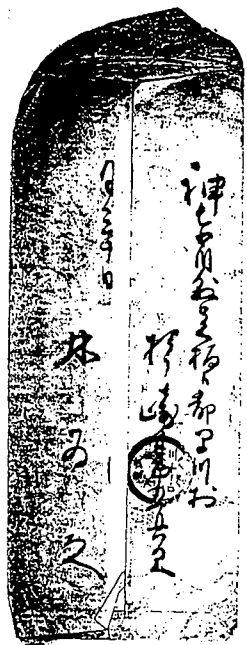
二月九日、廣島に移動した代吉は、同市横町十七番地津村利助方に宿営

☆廣島から澎湖島へ

澎湖島地図



▲明治28年1月30日 国府津停車場で面会を  
杉崎甚五兵衛・林 為之から代吉へ



し、ここでやく一か月を過ごす。この間は、とくに妻や相田宅宛の代吉の書簡が多く。支那行きの噂が次第に現実化していく過程がよくわかる。三月に入ると、外征に備えて双眼鏡や切手、はがき、煙草などを買い込んでいた。

「海軍の参戦」では、参戦した艦船の様子が詳細に報じられている。

三月六日、いよいよ金州丸に乗船し廣島市宇品港から出港する。馬関(下関)に停泊したのち佐世保に回航、五日、佐世保抜錨(出港)、二十日には澎湖島付近に到着するが上陸できず、二日間は海上に待機、二十三日艦砲射撃の援護を受けて、午後二時上陸、三時間ほど敵兵と戦い勝利をおさめた。二十四日は、砲台を攻めたり、馬公を攻撃したりし、午後六時馬公城に入城。

この間の状況は、「澎湖島の戦い」に詳述されている。その中には澎湖島の地理や住民の様子なども、要領よく紹介されている。

その後、相田軍曹は疫病(コレラ)の犯すところとなり、三月三十一日、無念にも不帰の客となった。当時の疫病の猖獗ぶりや悲惨な遺体の処理状況などについては、混成枝隊後歩第八中隊および同中隊長からの書状に詳しい。

戦後、賞勲局から従軍記章の証が贈られている。

## 私の青春

③

## 菅沼 博

## 実弾射撃

確か春の頃であったと思う。小銃の実弾射撃がおこなわれた。

幾日も前から班長や中隊の下士官達は我々に

「鎖骨を折らないように、床尾板の頬付けと肩付けを訓練しておけ」と言っていた。

班長の話によると、三八式歩兵銃の口径は六耗五であるが、九九式歩兵銃の口径は七耗七のために発射の反動は三八式の数倍もあると言われていた。

射撃場は狭山にあった。一時間位の行軍をした所で、三方が土盛りされた山の間のような場所であった。射撃距離は二百米の伏せ撃ちをやらされた。

射撃の反動は思ったよりも激しく、肩付け頬付けをしつかりとやっても銃身は十糧から二十糧位動いてしまった。

十発ずつの射撃で、私の成績は八十点以上の出来だった。

二百米向こうの三十糧位の黒丸は、照門、照星を通して見ると本当に小さかった。

下手な飛行兵も多かったようで、弾痕不明の度に表示棒は左右に大きく振られていた。

標的は二m×五m位の大ききで十糧位の角材で作られていた。その中心が心棒となって回転する回転式で監的壕の中に人がいた。射撃で穴があく度に表示棒で穴のあいた場所を示し、それによって成績が解るのである。

区隊長の小林中尉は、生徒の射撃が悪いとその銃を取り上げ、自分自身でその銃で射撃をしていた。

其の時の区隊長の顔は、苦虫をかみつぶしたような顔で、的に当たらないのが不思議というようなふうであった。

## 照屋少尉

第十二中隊は正面校門を入った右側宮庭の向こう側にあったが、昭和十九年五月飛行兵学校の編成変えがあつて、私は第八中隊に配属された。

そのときの区隊長は照屋少尉であった。沖縄の出身で、我々が外出して下宿を訪れた時、パインの砂糖菓子を食べさせてもらったことがある。区隊長はこの菓子は母の手作りで、最近小包みで送られて来たのだと話していた。

照屋少尉は我々の上官ではあつたが、今考えてみると彼とてそのときは二十何歳の独身の若者であつた筈である。その彼が母手作りのパイン

の砂糖菓子を我々にふるまってくれたのだと考えると、何か胸にじんときくるものがある。区隊長は優しい上官であつた。

第八中隊は正門を入つて右側にあつた。衛兵所の裏側の位置にあつた。そして私の内務班は宮庭に面し、反対側は軍隊と娑婆を区切る木立とともに土手があつた。

軍隊では員数の付け合いが多い。私の内務班の寝台の位置は宮庭に最も近かつた。窓や扉には鍵は無い。訓練や教室の座学で不在にしていたとき、他の中隊の者に私の飯ごうや水筒を員数をつけられてしまった。

註 旧陸軍では支給された官品例えは兵器手入れ洗濯バケなどを失うと、他の兵から失敬して埋め合せなければならなかつた。これを員数をつけるといつた。敷布や襦袢・袴下など物干場に干していると、他中隊の兵から狙われることが多かつた。

ちゃんと整頓してあつた飯ごうが無い。消灯後も、私はどうしたらよいかわからなくて教室の自分の机の所でシヨボンとして座りこんでいた。

区隊長は自分の下宿へ帰らずに、消灯後の暗くなつた教室にいる私を捜しに来た。そのとき官品を無くしたにもかかわらず、区隊長に怒られた記憶は無い。彼は優しく事情を聞くと

「気にせず直ぐに就寝せい」と言ってくれたのである。その翌日兵器係下士官から直ぐに無くした物を官給された。

照屋少尉は他の将校とちよつと変わった。祝日とか行事の時は大抵の将校は赤い長靴をはくのが普通であつたが、彼は黒の長靴をはいてきた。

普段は赤の長靴をはき訓練や教育をしていた。あの沖縄の人らしいがつちりした顔立ちの区隊長、今どうしているのだろうか？

## 頭痛と最中

その当時私は時々頭痛に悩まされていた。頭痛は頭が痛いのが普通であるが、私の頭痛はちよつと様子が違つていた。

目の裏側が痛く、若干吐き気があり、気分が非常に悪くなつた。熱でもあれば診断も簡単かもしれないが何時も平熱の為、上官に申し出るのがためらわれた。

この持病は床に入り、肩を冷やさずに暖かく寝れば二・三時間でまあまあ治るものであつた。

冬が過ぎて春が近くになつた時分である。

持病の頭痛の為、私は上官に申し出てその日の午後は寝台の毛布に潜り込み、眠っていた。どれ程の時間を眠つたのか解らないが、気分が良くなり目覚めた時、目の前の銃手入れ台の上に小夜食の最中が目に入つ

た。  
私の眠っている間に小夜食の配分があつたようである。週番下士官が各班に配分したに違いなかつた。

頭が痛く気分が悪い時は食事も美味くなく、食事を抜くことが多かつた。したがって、この日も昼の食事を抜いていた。

目覚めたときは気分も良くなり、昼抜きのため腹も減っていた。この時、目の前に最中があつた。

私は寝台から起き出して最中の皮を一つ一つはがし、中のあんこを少し削り口の中に入れた。

最中は一人二個ずつあつた。班内の人数は約二十五人で、最中は五十位ある計算であつた。

当時の最中の皮は今と異なり、手作りで非常に堅く出来ていたし、あんこを入れるのも手作業であつたので、容易に蓋をはがしあんこを削ることが出来た。

甘いものが好物である私にとつて、腹一杯食べたあのあんこの味は、忘れられない思い出の一つである。

戦友は夕方班内に帰ってきた。私はなに食わぬ顔をして、私の分の二個を美味そうに食べたのは勿論である。

### 水泳訓練

昭和十九年の夏期休暇の前に海へ水泳訓練に行くことになった。場所は千葉県館山であつた。

私は小学生の六年生の時、神奈川

県足柄下郡の水泳大会に選ばれてできたことがあつた。勿論私が泳いだ百メートルの競争は私が一番ビリであつた。しかし、選手であつた事は事実である。

中隊の兵営の裏手には大きい防水用水があつて、その用水は十米四方位で、泳ぐのには差し支えない広さがあつた。

その防水用水の深さは水があまり澄んでいないので、どのくらい深いのか見当もつかなかつた。

とにかく、泳げる者、少し泳げる者、泳げない者に別ける必要があつた。その区別に従つて水泳帽も区別されていた。

飛行兵一人一人に白い六尺褌が渡され、その防水用水の前で中隊全員が整列させられた。

中隊長、区隊長、班長も褌姿であつた。中隊付きの下士官までもが褌姿で、用水の両側に片手間隔かんかくくらいに立ち並んでいた。

中隊の下士官以上の全員が出て来るなんてことは、珍しいことであつた。しかも褌姿で。

我々は用水の片側に五人位の縦列に並べさせられた。

すぐに理解出来たことは、泳げる者と泳げない者とをより分ける事が始まるということであつた。

区隊長の号令で一番前の列から順次飛び込まされた。泳げる、泳げないは関係なかつた。

「用意、飛び込め」

号令は区隊長が掛けていた。目標は向こう側の水槽壁で両側には下士官の助教が並んで見守つていた。

惨めだったのは泳げない者であつた。最初の号令で最前列の者が飛び込まされた時、二列以下の者達からどよめきに似た声があがった。

区隊長以下の助教達はその声が聞えた筈である。しかし、飛行兵達の不安は無視された。

上官の命令は朕が命令である。「死ぬ」と命令されたら何が何でも死なねばならないように訓練されていた飛行兵達である。

一列目が飛び込むと直ぐに飛行兵達は観念したように静かになつた。私は縦列の middle に並んでいたであらうか、私が考えていたことは、いかにして早く向こう岸に着くかという事であつた。

最初から溺れる者が続出した。飛び込むとそのまま水面に出てこない者が多数いた。

飛び込んだ約半数位は水面に出て来なかつた。助教達の行動は迅速ではなかつた。彼らは泳げる者が向こう岸に近くなるまで黙つて見つめていた。泳げる者の人数の確認をしてから沈んだ人数の確認をしているようであつた。

確認が終わると助教達の何人かが掛け声をかけて水の中に飛び込んでいった。

観念した泳げない者は、水面下の

水の中でも動かないで沈んでいるようであつた。このような静かな者は助教が二人位で両腕を支えて浮いてきたが、困つたのは水面上で騒いでバタバタ暴れている者であつた。

初めは数人の助教が飛び込んで引き上げていたが、若い元氣な飛行兵にしがみつかれてばかりいると、引き上げる助教も自分の安全を途中から考えるようになった。

沈んだ者はすぐに助けられていたが、水面上で暴れている者は、暫くそのまま放っておかれた。

何か叫びながら両腕を交互に動かして水上と水面下を往復しているうちに、だんだんと動きが鈍くなり水面下に沈む時間が長くなり、弱つてきたなど判断されたとき、助教達は飛び込むようになっていた。

このようにして選ばれた結果、私は一級泳者に指定された。一級泳者に指定された者はパーセント位であつたであらうか、館山に着いてから一級泳者は結構水泳を楽しむことができたのである。

数泊の水泳訓練であつたが、目的地へ着くまでが大変であつた。千葉駅から房総線へ乗つてからのことである。

区隊長は乗車した直後から、窓から顔や手を出すなという事を何回も繰り返して言っていた。

そのあげく、窓の鏡戸を閉めさせて、乗車後の環境整備をさせられた。夏の真つ盛りの中を狭い列車の中で

装具を言われた通りに整備したのである。生き地獄であった。

館山での宿泊地は、海岸からさほど遠くない場所の小学校であった。そして、地元の国防婦人会の人々が手伝いに来てくれていた。

朝から夕方まで水泳訓練であるが、一級泳者と指定された私にとつては、楽な訓練であった。

私はクロール、平泳、横泳、背泳、その他に立ち泳ぎ等大抵の泳ぎの型は承知していた。

したがって、教わることは何もなく、優雅に海の中で紅白に別れて競争を楽しんでいた。

それに引き換え、他の飛行兵達は水泳訓練の連続で顎を出していた。

それにしてもあの戦局が急な昭和十九年の夏、水泳訓練が海で出来たなんて信じられない恵まれた毎日だった。

### 夏期休暇

夏の夏期帰省は入校して直ぐの冬の帰省と期間は変わり無かったように思う。少し期間が長かったかもしれない。

冬の時と同じように米をもたされて帰省した。

その米の量は、冬の帰省の時と比べると、若干一日量が少ないようであった。

立川駅で中央本線に乗り、東京駅にでて東海道本線に乗り換えた。西へ帰省する者が相当多数同じ車両に乗っていた。私は新山飛行兵と窓側

の八月の暑い盛りにもかかわらずそんなに暑さを感じなかった。

私の乗った列車は各駅停車の為品川駅に止まった。

列車の中はまばらな乗客しかいなかったし、乗車する人も少なく駅は閑散としていた。

発車ベルが鳴り終わり、やがて列車はゆっくりと動き始めていた。

窓から顔をだし、涼しい風に打たれていた私の目の前に助役の帽子をかぶった駅員が流れていった。

その助役は動く列車の方を注意深く見つめていた。

「伯父ちゃん」と私は叫んだ。

その助役は私の伯父だった。

品川駅で伯父が助役をしていることは知っていたが、目の前にいようとは夢にも思わなかった。

駅舎の柱のそばで、白い手袋をした左手には懐中時計を握り、動き始めた列車を見つめていた。

伯父の顔は、何が起きたんだろうというような顔で最初は変化がなかった。

私は大声で叫んだ。「帰省で今から家にかえるよ」

叫んでいる間にも列車は動いていた。十米位離れていただろうか、ようやく私が解ったようであった。

手袋をした右手を挙げて私の声に答えてくれた。何か言っているようであったが、列車の轟音で聞くことはできなかった。

遠くなっていく伯父に、見えなくなるまで私は手を振り続けていた。伯父は初めと同じ格好で、じつとこちらを見つめていた。

二宮駅で十六期生の二見先輩が降りた。二宮駅の二と二見の名字の二とが一緒であったので五十年過ぎた今でも名字を覚えていた。

この先輩と話を交わしたのは、列車の中の一時間程の間だけであったが、駅から山よりの数分の所に住んでいるという事を聞かされた。

夏の休暇をどの様に過ごしたのか鮮明な記憶はない。しかし、石橋君の家にいき、二階の彼の部屋で乾燥バナナを御馳走になった事が思い出される。

それは長さ十糎位で鉛筆の太さより若干太く黒い色をしていた。それを口の中に入れて食べ始めたのであるがあまりにも不味いので、私はそつと口から取り出して二階の窓から投げ捨てた。

それは一階の屋根の樋に転がって入った。食料の本来に乏しい時代なのに、彼がしてくれた私への友情の手前、食べてしまったように見えるのに骨を折ったことであった。

八カ月前の冬の休暇の時は、朝起きると寒いにもかかわらず、軍人勅諭を全文裏庭で皇居の方へ向き唱えたものであった。しかし、夏の休暇の時は全部省略して全然唱えなかった。

にもかかわらず、帰隊してから区隊長あたりから下問されると、毎朝起床時刻に起き軍人勅諭を唱えていたと最もらしく言っていた。

このあたりから「一つ軍人は要領を本分とすべし」と言うこつを会得したのに違いない。

要領を使うとは、嘘を言うのとは若干異なっていたように思う。又、要領良く立ち回らなければ軍隊生活を快適に過ごすことなんて出来ず、その結果自殺するような人も生まれてきたのである。

東京陸軍少年飛行兵学校の在学中に事故があったというような話は聞かなかつたが、徴兵の兵の中には自殺するような兵隊がいたのは事実である。

## 賀春

平成十二 庚辰年



# 通り

## おしゃれ横町 (小田原駅前)

東京陸軍少年飛行兵学校の卒業  
昭和十九年九月二十四日、私は東

京陸軍少年飛行兵学校を卒業した。  
その日、父勝平が唯一人面会にきて  
くれた。



その日の昼食は赤飯で、おかずは豚かつであった。祝日のような何か事がある日には赤飯と豚かつが常であったが、その豚かつは歯で噛み切れないような堅さで途中で諦めて飲み込むのが常であった。

卒業式の日の昼食後に父兄達との面会が許された。父との面会は正門を入った左側の営庭の隅の、壊れた飛行機の側であった。

百式重爆撃機、呑竜のすぐ近くに座り込み、父との戦中最後の面会をした。けれども、私にとってはあの厳しい謹厳実直な父との会話はスムーズに進まなかった。

父は風呂敷包みの中から私の好物のぼたもちを取り出して食べるように言ってくれた。

家庭では、スパルタ教育で起居していたので、対等に父と話が出来るなんて考えられなかった。

食事の時は、正座で食べさせられ、父が箸を持ち食べ始めなければ子供達は食べられなかった。

その父が、ぼたもちを風呂敷包みの結び目をほじめて取り出し私に勧めてくれた。このとき私は、生きて家に帰れたら精一杯の親孝行をしようといふ心に言い聞かせた。

「昼食が赤飯だったので腹一杯だよ」

私は本当に腹が一杯であった。少年の私には謹厳実直な父は煙たい存在であった。

その時の話の内容は操縦、通信、

整備の中で操縦に選ばれた事、直ぐに宇都宮陸軍飛行学校に入学する事等が話の大部分であった。

この日も天気は良かった。父との面会がどのように終わり、そして別れたかの記憶は定かではない。

鮮明に思い出される事は、隊伍を組み少年飛行兵学校の正門を歩調を取って通り過ぎてから、歩調止めの号令がかかってからである。振り返ると学校の正門の左右に広がる土手の植え込みの上に、学校本部の屋根と、左右に各中隊の屋根が連なっているのが見えた。もう二度と来ないであろうと思いつつ眺めた兵営の屋根が鮮明に思い出される。正門の前の道は砂利道で、その道をざくざくと、足音をさせ隊伍を組んで歩いて行った。

宇都宮の飛行学校に入校する者は、同期生の中でもそんなに多くはいなかった。どの位いたのか記憶は定かではない。とに角、千五百名の第十七期生の中から選ばれた。操縦、通信、整備の三つに選ばれるのには、それぞれに試験があったが、私はあの憧れの操縦に選ばれた。我々選ばれた者達は東京經由東北本線が一路宇都宮の陸軍飛行学校に向かった。

(続)

# 酒匂上輩寺三十四世桜沢堂山の研究(一)

—合巻作者 柳水亭種清—

谷口得二

上輩寺三十四世 桜沢堂山の墓(小田原市酒匂)



桜沢堂山の名を知る人は稀である。彼が相州酒匂川(小田原市)にほど近い海辺にある時宗の九品山浄土院上輩寺の第三十四世桂光院其阿上人和尚として、明治四十年(一九〇七)三月二十日歿したことを知る人は更に少ない。

それ故に彼の波瀾万丈の生涯は、確かに一人の人間として極めて有意義な生き方をした者として、その安らかな最期に心からの賛嘆の情を贈らざるを得ない。この彼がまた、柳水亭種清の号を持つ合巻作者であり、恋川笑山の陰号をもって、作家活動を展開していた事に於て、研究对象として興味の尽きないものがある。彼の通称、そのいくつかの号が、そのまゝ、彼の作家としての足跡を示すように、能晋輔(狂言作者名)・八功舎得水(読本作者名)・淫水亭開好・恋川笑山・玉廻門(ともに陰号)・幾

何智俊と、それぞれの作品ごとに号を替用されたプロセスを辿ると、彼の永い人生航路が此岸から彼岸へと永遠に連なっていることを教えられもするのである。

ともかく、その内でも後世に名を留めた戯作者、柳水亭種清は、いくつかの例外はあるにせよ、徹頭徹尾、「正本写」に終始していた。彼は梨園の糟粕を舐めて、「正本写」なる歌舞伎の合巻本化に全盛力を傾倒した。

当時その方面では高名を博していた柳亭種彦の「正本製」とは、その成立の過程においても、その結実においても異なる意義を抱えながら、歌舞伎を別の角度から大衆に提供したのであった。旧作、新作いづれにせよ、上演外題の脚本たる「正本」を、いち早く要領よくまとめて、歌舞伎脚本の簡易化と共に歌舞伎を生

で見られない地方の人々にも、当時の江戸の劇場の雰囲気草双紙に盛ってみせたのであった。

従って彼のこれらの作品中には、これは確かに創作小説とは全く異なる、既に狂言作者によって仕上げられた「正本」の縮写として一つ新しい表現様式でもあった。

もとよりこの「正本縮写筋書本」が柳水亭種清によって創案されたというのではない。既に古くからこの種のもものは、彼より前に岡三鳥があり、一九があり、雪麿があり、種員、仙果などのものが板本化されて、確かに出梓されていた。ただ、これが種清独自の一方式として「正本写」に凝結していたことも確かなので、これを子細に追求してみたいもので

ある。そこに種清の「全正本写」の研究も、当然要求されるし、更に、また、その背後にある彼の人生遍歴の知悉も疎かにすることは出来ない。

文政の昔に柳亭種彦が創案したのは「正本製」で、製の字を「シタテ(仕立)」と読ませたが、種清の「正本写」では、写の字を(ウツシ)と訓よみさせた。前者は「脚本小説」とでも云うべきか、後者は「小説体脚本」とでも云っていいのではなからうか。種清のものは、すべて上演された脚本を資料としている。種彦のものは勿論、創作であった。その観点からの差違もあるうが、「正本製」と「正本写」とは、ただ一字の違いではなく、大体に、それぞれの心持が変わっている。

この「正本写」という言葉は、種清以前に使用されていなかったように思うが、種清の「正本写」は、安政三年(一八五二)の「蝶衛亀山染」(亀山仇討とお房徳兵衛)から万延元年(一八六〇)の「花摘籠五十三駆」

上輩寺三十四世 桜沢堂山 種清 謹記



嘉永八年卯正月

柳水亭 種清

「千種花(羽蝶々)」初編序末 「龜山敵討」

まで、前後廿八種、その内、廿種は安政度の出版である。種清合巻作品は、他の作家のものと見較べて、目立つことは、彼の筆致が現在の「芝居見たま、」に近いことである。「正本写」＝「芝居見たま、」となることである。

しかも「正本写」と云い、会本と謂う、この両面の使手だけで終ったのではない。通常の合巻本のみならず、読本にまで筆を染め、はては明治期最後の江戸戯作者の一人として、魯文らと共に実録小説までも手にかけ、更に狂歌までも綴った経過を辿ると、彼が筆に生きる事の執着が執拗なまでに凝り固まっていたことが知られて教えられることが多い。

そして又一方、その裏には艶本作者としての恋川笑山が生き続けた。この艶本画作者としての在り方は、英泉にも、量的には劣らない作品数を残して、飽くことを知らぬかのように、描きまくった半人生の結実であったと云つても過言でない。

今ここに、会本画作者としてののみ、英泉と対比してみるならば、時代の趨勢、流行も見逃すべきではないが、唯この結実の特色対比のみに於ては、英泉にあつては「半紙本」が多く、恋川笑山にあつては、圧倒的に、「中本作品」が多かつた。

このことは、かの維新幕末の風雲急な内憂外患の時節とて、出版元が時運に要請されたのか、それとも出版元、自らが迎合したものか、或は

また、庶民の経済力からか、殆ど、笑山の一人舞台上に近い末期艶本の乱作は、強運にも、この「中本型式」の作品が最もこの時代に適合しているたのであろうか。少くとも会本画作者としての笑山のものには「和印大錦帖」は、いまに至るまで、一つとして見出されていないのである。三流絵師の悲哀が、彼をして会本絵師としてのみ充足させられねばならなかつたか、又彼の画系が艶本以外、錦絵出版の場が彼には全く与えられなかつたのか、悉さに推量してみる

と、どうも後者の推理の方が正鵠を射ていると思われる。出梓に際して与えられた「中本型式」の大きさを最大限に活用するためにも、折込、見開き絵を幾多にも利用して画面の拡大を図つたことも、一つの創案として高い評価をうけてもよいのではなからうか。

ともあれ、恋川笑山の活躍の後期は勤皇佐幕の動乱期であつた。幕府の市中取締りは、恐らく江戸に於ても、京都に劣らず倒幕の志士に焦点が注がれて、「和印」など一顧だにしまなかつたことも確かなことであつたと思われる。江戸の両国では、「それつけやれつけ」の堂々たる見世物さえあつたことを考え合せれば、「和印」刊行に出版書肆が手を拱いてい

るとは到底考えられない。絵師にも、戯作者にも頼みに頼んで摺りあげ、板木が潰れるまで摺りまくつて、市中に流布したのは当然であろう。特

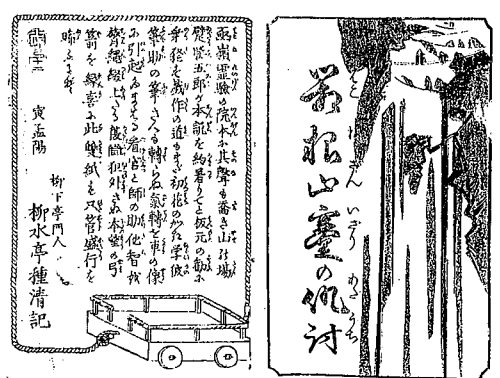
に板元が狙いをつける焦点として不足のないのは、一人で採管を振るい、且文辞を弄しうる才人として、恋川笑山に的が絞られるのも、また自然のなりゆきなのであつた。

当時この道の鬼才とまで云われた英泉は既に嘉永元年(二四八)に歿している。その英泉は戯作者一筆庵可候として天保改革後も、その残喘を保つてはいたが、最早その喘ぎも遠く潰えていた。かくて英泉の後の立役者として、頭角を矯めていたのが、この恋川笑山その人であつた。もとより專業絵師として国貞、国芳を始めとして、その門下生も既に活動はしてはいた。戯作者でも、既に柳下亭種員、仙果などの先達がその高名の座を占めて、目白押しに坐っている、しかもその後を追うように、魯文も登場し始めていた。

出番のチャンスは熟している、才長けた者が何で何時まで、その爪牙を匿し蔽つておく必要がある。いや、それにまして、商賈の鋭い嗅覚が、何でこの才者を嗅ぎつけないことがあり得ようか。高価な画筆料を大家に払つて、しかも、その高名を伏せねばならぬ艶本にしてみれば、むしろこの際、無名の実力ある新参者に無名なるが故に廉価な画料に依倚して、その利を得んとするのは当然の商道であつた。

さてこの堂山研究稿を進めるにあつたて、先ず問題になるのは、この恋川笑山が確実に柳水亭種清であ

り、淫水亭開好、八功舎得水であり、しかも通称堂山であるというについてである。これは自らが、斯くく証した記録が何一つとして見出されていないので、ただただ彼を知る先人の記録にのみ頼らざるを得ないのである。その一つに、



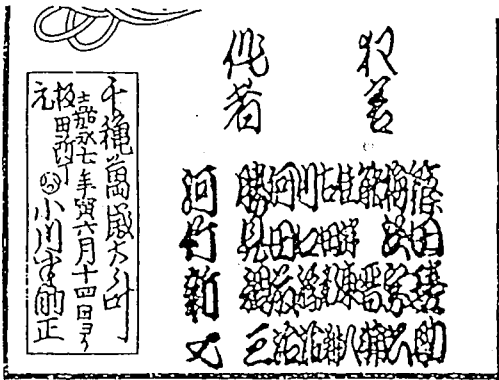
『浮世絵志』第十八号(昭和五年六月号)の『秋農屋漫筆』梅本塵山の記事(艶本作者)の項に、三人の名を挙げていの中で、彼の淫水亭開好について次のような一文をものして

淫水亭開好は別号、恋川笑山、本名は桜沢堂山という。仮名垣魯文の説によれば、元は遊行の僧であつたが、後に還俗して、河竹新七(後黙阿弥)の弟子となつて、狂言作家の群に投じ、さらに新七の紹介によつて、柳下亭種員の門人となり、柳水亭

種清と号し、戯作者となつて、小説を著わし、浅草猿若町の三劇場に於て演ずる歌舞伎狂言を草双紙に書き換えて世に出し、また、八功舎得水という変名を用いて、豊臣勲功記を著わしたと云う。安政の頃、専ら艷本に筆を把つて読本風のもの、人情本風のもの、切附本と称える草双紙風のもの等、数十部を著わしたが、それが悉く古人の旧本を焼直し、または、翻案したのみで、創作と見認むるものは、殆ど絶無で、筆者の見たもの、内で、主なるものばかりでも、左の数部がある。

以上、秋農屋の記事にしても、種清、開好、同一人物については、傍証のない結論だけを呈示している。

絵本番付「会稽殿下茶屋茶」河原崎座



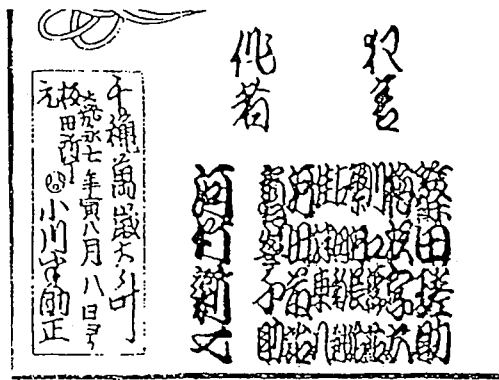
しかし旧時代の文筆家たる塵山に記事だけに、これは無視することはできない。

一応この仮説に従つて、種清を中心として考究することから、さらに別の古い資料によつて、彼の人間像を窺つて見ることにする。それは、『早稲田文学』(大正十五年四月号)に、三田村鳶魚の筆になる「柳水亭種清」なる一文が記載されているが、その中で、鳶魚は、「種清は黙阿弥の弟子だと聞いたから、曾て、河竹繁俊氏に問合せたことがある」と記して、河竹繁俊氏の返事をそのまゝ、次の様に載せている。

種清の事、大凡申上候。

文政四年生れ、六、七才の頃、生地飛騨高山より越後に行き、両親に別れし後、遊行上人に伴

絵本番付「吾婿下五十三駅」河原崎座



はれて江戸に來り、日輪寺(浅草柴崎町)に入る。役僧にまでなり、女一条より、傘一本にて寺を逐はれ、黙阿弥の門に入る。紋番附へ能晋輔として載りしは、嘉永三年の顔見世よりなれども、嘉永三年の交に入門せしものと存候。嘉永三年とすれば、三十才に相成居候筈に御座候。後柳下亭種員の内に入り、種清、柳水亭と名乗、何故に狂言作者となりしかは不明。又何故に狂言作家より戯作者に転ぜしかも不明に御座候。然し多分は相当に仏学もあり、種員と黙阿弥とは親交有之候まゝ、望まれしにも哉。又は始め狂言引直しの草双紙をやらせて見て、案外旨くまとまり候故、戯作者の方へ転じ候にも哉。何時戯作に転ぜしか明確ならず候へども、嘉永七年(安政改元)六月、河原崎座の紋番附迄にて、其以後能晋輔の名は無之候。安政三年三月、市村座上演の「雪駄直し」(黙阿弥作)―(筆者註「夢結蝶鳥追」)より、種清綴るとせし草双紙の続出する所を見れば、安政年度よりは種員門下に入りしものと考へられ候。安政の末に至り、お詫びが叶い、遊行上人に相見致候て、其後に常陸にて寺を持ち申候。その年代は知れ申さず候へども、戯作を廃し候後のことと存じ候。大分、明治の初にも可有

之候。明治廿年前後より相州酒匂、上輩寺の住職に相成、同四十年三月、八十七歳にて歿し、同寺の墓石には、拜光院箕阿上人智俊堂山和尚と有之候。八功舎得水と申すは別号に御座候。晩年にも精力壯健にて終日、机対し、筆を執り絶えず何か書き居候由にて、さらに倦色見え申さずとか。

この書簡の記事は信頼性は高いことは理解できるが、別の資料も見出されるので、或る事項については、それらとの対比勘考の上で、訂正されなければならない。

但し、如上の資料の内、「浮世絵志」では幼少時については欠落し、『早稲田文学』では簡単に触れているのみであった。然るに、後者と同一筆者、河竹繁俊氏の「河竹黙阿弥」(創元選書・昭15刊)には、前記の事項以外、些に、附加された幼少時代の記録がある。

……晋輔はもと飛騨高山の産、文政四年(一八三三)の生れであったが、六、七歳の頃、両親に連れられて越後に行、その地に於て、両親とも失ひ、途方に暮れたのを近所の寺に救い上げられ、やがて遊行上人の巡錫された時、江戸に伴はれ來つて、日輪寺の小僧となつたのである……勿論この記事の出所については確



証はないが、恐らく種清自らの告白を著者が聞いて、それをそのまゝ、記録したと思われる。しかしそれにしても、これをそっくりそのまま、受容することが困難な別の重要な資料がある。その根拠とする資料として、種清が死去した小田原市橋支所、同酒匂支所に残る彼の除籍された古い戸籍簿には次のような記載事項を確認することができる。

本籍地 神奈川県足柄下郡酒匂村酒匂参百五拾六番地  
 東京府下谷区下谷坂本町卷丁目  
 平民桜沢茂助二男明治七年第七

酒匂町 第七二八番

種清の明治十八年「白紐物語」第七二編作頃の居、相模国陶陵郡山西村時宗因縁山光福寺住

拾四号布告ニ依リ定籍ス  
 明治参拾参年式月式拾七日当郡下中村山西式千参百参拾七番地ヨリ転籍届出  
 全日受付入籍<sup>㊦</sup>

明治七年第七拾四号布告ニ依リ定籍

死亡全日届出全日受付<sup>㊦</sup>  
 明治四拾年参月式拾日午前式時  
 全員除籍二付キ昭和式拾式年五月参拾参日本戸籍抹消<sup>㊦</sup>

以上の通りで、これまで不明であった彼の父の名も、彼が次男であることも、そして生年月日さえ一応把握できたのである。殊にこの生年月日の記録は今迄誤つて考えられていた前記の河竹繁俊調査にある歿年齢を訂正する新資料で、この通説となつている八十七歳歿年令の出所については、恐らく酒匂上輩寺にある彼の位牌裏面の朱漆記「享年八十七歳」の記載に準拠したものと推定することが出来て従来の通説を訂正し

父 桜沢茂助

なつては、恐らく酒匂上輩寺にある彼の位牌裏面の朱漆記「享年八十七歳」の記載に準拠したものと推定することが出来て従来の通説を訂正し

母 不祥

なつては、恐らく酒匂上輩寺にある彼の位牌裏面の朱漆記「享年八十七歳」の記載に準拠したものと推定することが出来て従来の通説を訂正し

二男 桜沢堂山

なつては、恐らく酒匂上輩寺にある彼の位牌裏面の朱漆記「享年八十七歳」の記載に準拠したものと推定することが出来て従来の通説を訂正し

出生 文政六年拾月拾五日

なつては、恐らく酒匂上輩寺にある彼の位牌裏面の朱漆記「享年八十七歳」の記載に準拠したものと推定することが出来て従来の通説を訂正し

戸主ト為リタル原因及び年月日

なつては、恐らく酒匂上輩寺にある彼の位牌裏面の朱漆記「享年八十七歳」の記載に準拠したものと推定することが出来て従来の通説を訂正し

神奈川県酒匂郡山西村三三三三七番地		平氏	戸主	櫻澤堂山	大政六年十月十五日 生
東京府下谷区下谷坂本町卷丁目平民桜沢茂助二男明治七年第七二八番		前戸主	主	サト	天保八年八月一日 生
足柄下郡酒匂村酒匂参百五拾六番地			妻		
明治七年第七二八番					
この謄本は原籍の原本と相違なきこと					
認和四拾五年五月六日					
安西貞					
神奈川県足柄下郡橋本町長					
年 月 日生					
年 月 日生					

たい。  
 河竹繁俊氏が曾つて、種清の足跡を追つて、この上輩寺を訪れた際、当時の住職六郷信明氏及びひで夫人から得た数多くの材料の中から、特に彼の位牌裏面の朱漆記に記された年令が決定的な資料となつて、広く紹介されてしまつたとみられるのである。

明治四十年  
 参月廿日亡  
 桂光院其阿上人智俊堂山和尚

（背面 朱漆書）享年八十七才

と記してあつた。  
 過去帳には歿年月日は同じであるが、

上輩寺  
 桂光院其阿上人堂山和尚 桜沢堂山 三十四世

とあるのみで、享年は記載されていない。この事実から類推して、位牌記載の享年は、恐らく、堂山の妻であるサト女の記憶によつて指示作製されたと推測することが出来る。このサト女の記憶は、堂山の晩年に於ける記憶によつて伝えられたものらしいと思われてならない。（続）  
 （小田原市史編さん室）

## 露国・日露の役俘虜のこと(17)

八十七年ぶりのお礼 後編(12)

内田善作記 「日露戦役従軍記録書簡往来」  
吉田雪子編

高橋源三郎氏より

内田重兵衛殿(巻紙)

前文は御容赦下され度候。さて、三月九日の実況を左に申し上げ候。

先ず我が旅団の戦闘体形に転じたは、午前七時頃にして、我が根拠地は田義屯と言う清国名の村落にして、敵の根拠地は三台子と言う村落なり。両村の隔たりは約二千メートルにして我が団は三台子を攻撃する目的なれば、第一連隊は右翼に第十六連隊は左翼に十五連隊は援軍となり、午前七時頃より攻撃行動を開始したり。順次躍進して、約二千メートルと思う処に堤防の如き物あり。依って軍は一時之に依り居りたり。時に十二時頃なりき。依って十六連隊なる左翼の隊と連絡し、又躍進を起こしたり。時は午後一時半より二時頃なりき。此処より四・五百メートル進みたる時、敵は如何にも大部を以て左翼より逆襲せり。依って十六連隊は退却し、我が隊既に包围せられんとありき時、小生は負傷せり。

故・隠岐威重

依って未だ連隊は退却せざる内に退却したり。退却途中に清国人の墓地ありて小生も此処にて一休みせんとしたるに、せめての事に以前一時止まり居りたる堤防なれば宜しく候へ共、如何にせん其処までは未だ二百メートルもある次第なれば、流散弾は霰の如く、小銃弾は申すべくもなく左翼より敵、竜となり遂に此処に止まる暇もなく退却したり。

時に内田氏は足部を負傷したるに於いて同所におりたり。依って共に退却せん事を請求するも、一身散乱の時なれば何とも致し方なく、遂に小生はその場を離れたり。

時は午後四時頃なりき。その後の事は知り能わず。只人に聞き或いは察するよりはなく依って其の三の証を挙げ申さん。

一、負傷の儘に入院すれば何れ病院にあるは御通知なざる筈なり。

一、戦死とあればその死体は収容の時ある可く筈、然るに死体を中隊が検する無きは戦死と信ずる由なし。

一、我が中隊に於いて捕虜となりたる者多数あるとの説聞き及び、現に沢田伍長という者は敵に引かれて行くを見たる者二、三人ありたる由聞き及び候。

右次第なれば中隊においても確たる通知をなす能わずして延引するものと察し候。何となれば確かに戦死したる留守担当の人には皆通知を出したる程なれば貴殿にも通知あるべき筈。中隊より戦死したる者の通知をなしたる証拠として別紙葉書を示す。

四月十六日  
後備歩兵第一連隊第四中隊長代  
歩兵中尉 霜 新八郎氏より  
(書面)

歩兵一等卒 内田 善作  
右者、三月九日、奉天付近に於いて戦闘の際、行方不明となりその後捜索隊を派遣し日々百方搜索致し居り候へ共、今日までは生死不明、尚所在判然候節は直ちにご通知致す可く右御承知相成り度候也。

明治三十八年四月二十二日  
出征後備歩兵第一連隊第四中隊長・代 歩兵中尉 霜 新八郎  
内田 重兵衛 殿

隠岐少将閣下へ  
内田 重兵衛より

熱し高き閣下には我が湘南の地をよきと思し召されて此処に居を下せ

られしは、誠に幸いになん。然るに今度閣下にはこの湘南の地より虎伏す野辺に悪為す醜草を払い清めん為多数の兵士どもを引き具して彼の地に渡りてよりは一方ならぬ御心労を忍ばせられ大なる勲功をあらわし御身体も御健かの由誠にこよなき極みになむある。ながく行く末遠く御武運長久を祈り奉る。湘南の地も漸く春心地せられ野も山も霞棚引き、綻びたる桃の花も捷の報らせを祝うにや、今を盛りとほほえみて鳥の鳴く音も何となく閣下の美はしき勲功と御健かなる御身体とを寿ぐ様に聞えられ、いともいとも目出度き極みにこそ。

四月三日 小田原町十字二 小間物商 内田 重兵衛  
隠岐少将閣下 待史

隠岐少将閣下への依頼状  
内田 重兵衛より

閣下の部下に愚息内田善作なる者、後備歩兵第一旅団第一連隊第四中隊第一小隊第二分隊の一部として従軍致し居り候。過日戦友より奉天付近の田義屯攻撃の際、捕虜或いは負傷して野戦病院にあるやの由、報じ来たり候へ共、もとより戦死は家の者も期し居る事故、悔いる如きは思い居らざれど報知に依れば捕虜と申す言葉も之有り候故、万一にも斯

かる如き事ありては何となく郷閭の者も、自身のみならず家の者も肩身狭く恥じ入る次第に候へば、この事実に痛恨の事に堪えず、閣下御多忙の際に於いて御手数数思わすは甚だ恐縮の至りには存じ候へ共、従卒なりとも何なりともして中隊の野戦病院に問い得る事ならばこの上もなき幸に候。

卑賤の身をも顧みず此処に辞を申し御願ひまで。

隠岐少将閣下により  
隠岐様留守宅へ

本月十四日出の書面去る二十二日通ず。披見、為替も無滞相届きたる旨安心。

先便申し遣したる通り奉天の戦いは無事なるを得しも沢山の死傷者をこしらへ残念極みなし。此復讐は是非致さねばならぬと一同発奮致し居り候。内田重兵衛倅は今失踪不明最早病院にも居らず、又死体も不見当に付、此の上は敵に連れ行かれたるに相違なし。尤も負傷して歩行の叶わぬのを連れ行きたるなれば不名誉になし。此中間旅団中にも未だ沢山の有る中に特務曹長ある次第なれば気永く待たるる様翁屋へ申し遣す可し。

隠岐旦那様へ(十字町の留守宅)  
内田 重兵衛より

拝啓仕り候。追々暖和の候に候処、閣下□倍御勇壯健に渡らせられ大慶の至りに存じ奉り候。陳生愚息善作の事に付御厚配に相成り、御尊宅様迄、本人所在も其の都度仰せ下され、奥様及び今朝旦那様より御文意の趣、御申し聞き御親切の程、有難く感謝奉り候。家族一同も喜悅罷り在り候。去りながら或は捕虜の身と相成、否かは未確定に候へば又一層の心配に之有り候間、何卒この上も自然所在御承知……

御尊宅様へ幸便の節は爾來其の様に懇願奉り候。

閣下へ直接左様の義を懇願候は甚だ恐縮の至りに存じ候。私共の衷情は御憐愍の上宜敷く思し召され度、先は御厚配に成り候御礼旁々、尚御願ひ申し上げ度、此の如く御座候。

五月九日 早々 敬具  
隠岐旦那様 内田 重兵衛

小田原町役場兵事係より  
内田 善作殿 御家族御中

内田善作儀、安否取調 歩兵第一連隊補充大隊に照会せし処、同隊より右に付未だ何等の通報も之無き旨回答之候に付、此段御通知に及び候也。

明治三十八年四月二十二日

\*筆者の祖父重節が内地の妻磯子に出した手紙の一部をしるす。

この度の戦闘には小田原の者も多く

死傷致し、二丁目(十字)の内田重兵衛倅善作は今生死不明にて、重兵衛氏より尋ね来り候共何分相分らず。敵の捕虜となりし疑いは万々なし若しや内地に後送されしやは測られず、との旨申入候。

注……同封の葉書には「この右の御書面を自宅にお送りになられたものを奥様(磯子)が内田宅へ御持参下さった」と書いてあります。この葉書は内田重兵衛が日本橋の回漕問屋(親戚)へ行つていましたので、内田の留守宅にいた誰か(善作の妻か?)が東京の重兵衛宛に出したものです。(吉田雪子記)

椎野莊之助より  
内田 重兵衛様

文略御免下され度候。時に日増しに暑さに相成り御尊家愈々清栄賀し奉り候。存分御無音平に御海谷下され度。

陳者、今日午前、奥津さまに内田氏の事大略、郵便にて申し上げ候へ共、御地前川(小田原市前川)の石塚八郎殿より郵書着、拝見仕り候処、内田氏の事に付き、同じ金手(天井町)出身にて騎兵の軍人、残念にも奉天会戦の節捕虜となりしも、その節ハルピン露營の同室にて善作氏に面談致した処、両足負傷致し居り候。それは田義屯の戦に捕虜となりし

別紙石塚氏の郵便封入致し候間、左様御承知。就ては是まで御心配をなされし事此の書状にて必ず安心下され度。

最早講和もそろそろ公然新聞にあらわれ申し候間、近々の中終局を結び申す可く候に付凱旋致し、内田氏もハルピンより帰營仕る可く候条、その節は御拝顔を得、お互に困難話も仕る可く候間それを楽しみに御待ち居り下され度、呉々も御願ひ申し上げ候。

何卒国府津ふじやに御出で下され御問合せ候。その上早速御返事の程お頼み申しあげ候也。降つて小生も何も事無く軍務に罷在り候条、他事ながら御休心下され度候。先は時下不順、御自愛專一、皆々さんによるしく。

六月二十五日

同封の手紙・石塚八郎氏より………椎野莊之助殿

貴下と同輩とかなる小田原翁屋内田善作君の消息、判明致し候。金手の人にて騎兵科の者、捕われ目下ハルピンに在り同室に内田善作という者、両足に負傷して捕われあり云々と、実家へ申し越せしに聞けども、当人よりは書状あらざれば確かの事はわからずと国府津ふじやに話し候。

六月十三日

# 楽寿園「旧芝離宮庭園」の 「謎の石柱」について

小野 意雄

一松田尾張守屋鋪ハ西海子御花畑  
ヲ云 右小路ノ入口今ニ表門ト  
云此門ノ柱トテ

右柱江戸芝清水候ノ浜ノ御屋鋪  
ニアリ北条家老臣松田尾張守門  
柱ト云木札ヲ建

本御屋鋪ノ時

常憲院(綱吉)御成之節富士見ノ  
御茶屋ノ柱ニ用ユト云此茶屋ニ  
珊瑚珠ノ簾ヲ掛ルト云又ビード  
ロノ御茶屋ト云

右記の記事が三浦義方著『相中棟  
志』の「仁・勇・智」三冊の内  
の一冊、『仁篇』の「松田尾張守」の  
項に収録されている。(神奈川叢書第  
五編九十三頁より引用)

前に紹介した田代道弥氏の説の根  
拠記事である。田代氏の話は、右  
記事の前半の紹介に止まり、後半部  
を聞き漏らしたということかも知れ  
ないが、この欠落が、私の理解を疎  
外していたことが判った次第であ  
る。文献・資料調査が遅れてしまっ  
たことを深くお詫びしたい。

問題は、①『大久保加賀守芝金杉  
上屋敷之図』ならびに『同絵図』に、  
「謎の石柱」の姿の記載が、定か

ズレタ位置関係から、用途の推定が  
出来にくいことだった。

菊潭の「楽寿園記」は、月波楼に  
ついて「数尺之楼 扁月波 在園之  
東南隅」、「登月波之楼 則坡翁之所  
言欲問尋焉」と述べている。

以上のことから、つまり、右の資  
料により「月波楼」は、三浦義方の  
頃には、「富士見茶屋」とか「ビード  
ロ茶屋」と呼ばれていて、「謎の石柱」  
は、その茶屋の柱として使用されて  
いたと推定され、紀伊家の芝御屋敷  
になってから、建物の改築・施設の  
改造等にもなつて、現在地に移送  
されたこと、推定することが可能にな  
る訳である。

小杉氏は、「謎の石柱」が、資料的  
に初見されるのは、紀州家の図で、  
「馬場の北端」の現在地への描出だ  
という。「駒繫ぎ石」という通称の発  
生は、ここにあると思われる。また、  
松田屋敷の「駒繫ぎ石」ではなかつ  
たという推定も田代氏にあった。い  
ずれにしても、石柱に穿った穴のズ  
レタ位置関係は、この石柱の用途が  
なんであったかの「謎」を依然とし  
て残している。

楽寿園は、大久保家から堀田家へ、

に見当たらないこ  
とと、②使用され  
てる石材が「竈石」  
であれば小田原に  
関係する筈だとい  
うこと、そして③  
石柱に穿った穴の

二年半ほどして御三家の一つ、清水  
家の下屋敷になり、その後二十三年  
して、弘化三年に紀伊家に移ってい  
る。

そこで小杉氏は、謎解きの仮説と  
して、①月波楼の旧趾、②熊野信仰  
に関係ある石造物、③観測塔、④標  
識塔の四説を提起している。

他方小杉氏は、「池の南端と園の南  
端との空地をよく見ると、庭石の打  
ち捨てられているのが三、四カ所に  
見出せる。これが、大久保家上屋敷  
時代にあつたビードロ茶屋の趾であ  
らう。」「ビードロ」というのは言うま  
でもなくガラスのことで、障子窓に  
ガラスを張つてあつたのだろう。小  
石川後楽園の函徳亭がやはりビード  
ロ造りであつたことを思い出す。こ  
の茶屋は、海を見る楽しみもあつた  
だろうが、やはり池を眺めるのが主  
だったのではなからうか。あるいは  
ここに「月波楼」があつたのかもし  
れない。ここからの池の眺望は奥行  
きの深さを感じさせ、山中の閑居の  
感慨を抱かせるのである。その遠近  
法の巧みさに感心しながら……」と  
案内する。「月波楼の旧趾」説である。  
三浦義方の記録により、「月波楼」  
の仕様もイメージング出来、既述の  
とおり、「月波楼」の遺構の現在地への  
移設」説が、ほぼ適切と推定する。  
ここにおいて、將軍御成ご接待の  
趣向として、この石柱が使用されて  
いると思われるところに面白さを感じ  
る。忠朝らしい趣向だと思ふ。

珊瑚珠の簾の趣向もさることなが  
ら、家康による石工青木善左衛門取  
り立ての故事(小田原城の焔硝倉造り)  
のことも偲ばれる。

この石柱が小田原産の竈石である  
という田代説が活きてくる。田代氏  
によると、小田原地方の初期の石塔  
や石碑のほとんどが竈石で、建武碑  
も然りと云う。

ちなみに、竈石の石切り場は、板  
橋から荻窪・久野にかけて存在する。  
空気を含み軽く、熱に強く、加工し  
易い玄武岩なので、竈用のほか防火  
壁、石倉造りによく使われていた。

参考「久野産釜石を語る……話し手小  
林 誠さん」(聞き語り おだわら  
ふるさとの記憶)平成九年三月小田原  
市刊)

楽寿園(旧芝離宮庭園)



# 朝鮮ビエ書留記

## 石綿 勉

在来種作物・朝鮮ビエを  
作っていた方からの話を、  
お届けします。小田原付近  
では、すでに消滅してし  
まった作物ですので、回顧  
談となります。

私の持参した実物の穂を  
見ながら、話を続けました。  
両者に誤解のない、朝鮮ビ  
エの認識でした。

Mさんの話(男、七十一歳、  
小田原市久野在住)

朝鮮ビエは、終戦二、三  
年あたりまで、開墾地に  
作っていた。家用に、三  
畝ほど作った。

とり粉をとるのが、主  
だった。朝鮮ビエのとり粉  
はねばりが少なくて、餅が  
とりやすい。このとり粉を  
かけると、餅がべとつか

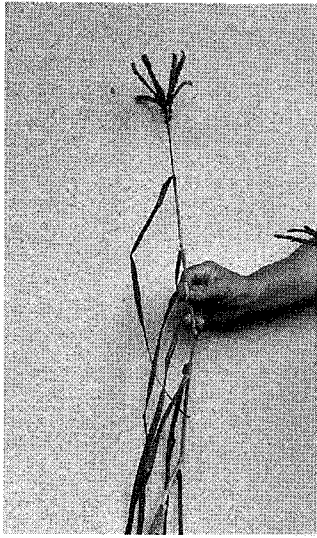
い。板にも手にもくつか  
ないので、一番使いやすか  
った。

餅を搗いた時や、そばや  
うどんをつくる時に、よく  
使った。上新粉だと、粉っ  
ぽくなってしまう。

お菓子屋さんには、大福を  
つくる時、よく搗くので、  
餅がねばっている。朝鮮ビ  
エのとり粉をよく使った話  
を聞いた。

とり粉の他に、オヤキに  
も使った。カギモロコシの  
粉をまぜて使った。朝鮮ビ  
エの粉だけだと、ねばり気  
がないので、この粉をまぜ  
てねばり気を出した。小麦  
粉は使わなかった。

オヤキは、木鉢に粉とお  
湯少々を入れて、こねる。



そして手のひら(掌)大に平  
たく丸くして、ゆでる。カ  
ギモロコシの粉が入ってい  
るので、オヤキをとると、  
指にくっついてしまう。鉄  
器で焼くと、くっつかない  
で香ばしく食べられた。

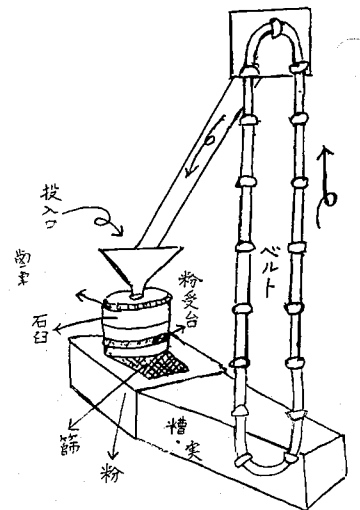
おこじはん(おやつ)の時  
に、砂糖や砂糖醤油につけ  
ながら食べた。香ばしくつ  
て、まずいとは思わなかつ  
た。冬の時に食べた。

煮団子にして、食べた時  
もあった。春先に食べた。  
みそ汁の中の団子に、わら  
びや干し大根を「しんのみ」  
にして食べた。私はおおい  
しとは思わなかつた。

朝鮮ビエは、十月から十  
一月にかけて収穫した。収  
量は少なく、三畝で二斗ぐ  
らいだったと思う。実の粒  
が、なたねみたいに細かい  
ので、陸稲(おかほ)より  
ずっと少なかった。

刈りとった朝鮮ビエを、  
天日で干して、マンガ(干  
歯こき)で扱いた。

穂がそのまゝ、残っている  
ので、クルリで叩いて、実  
をとった。



保管しておく。

た。更に細かい篩(ふるい)二ミリほ  
どの網目)にとうして、小  
さいゴミを取り除いた。

これをよなげる。(水の浮  
力を利用して、実・小石や砂、  
ゴミにえり分ける仕事)

篩(ふるい)にかけたのをバケツに  
入れて、水にさらすと、ゴ  
ミは上に浮いてくる。(土は  
水にとける)これをすくい  
とって、小さいゴミを取り  
除く。

バケツの水をゆっくりか  
きまわすと、実が泳ぎ出す。  
これをザルの中にこぼして  
移し変える。

最後は、小石や砂が残る  
バケツの中となる。(実と区  
別された小石や砂で、浮力を  
応用した実のとり出し方)

ザルの実を、ちがやござ  
(畳表より少し太目の)にし  
いて、干す。実がとても小  
さいので、藁の筥(じし)は使えな  
い。乾いたら、袋に入れて

今度は、朝鮮ビエを製粉  
する話となる。  
製粉所で粉にしてもらっ  
た(当時の製粉機を、図面  
かいてみました)。

水車の心棒に木の歯車が  
ついていて、回す働きを石  
臼に伝えていた。(この作り  
付けは、今後に聞きがきする  
課題とします)

石臼の間からこなれ出て  
篩(ふるい)にかけられる。篩の下に  
粉が積もる。はじめにでき  
た粉を「一番粉」といった。  
これがとり粉となった。

まだこなれない実は、槽  
にまじって篩の上に残りま  
す。これが箱に集められて、  
図面のようにすくわれる。  
これが製粉されて、二番粉  
となる。糟も一緒に製粉さ  
れて、実の肌の色が出た  
赤っぽい粉になる。二番粉

が出てきたと、色ですぐわかる。これが、オヤキや煮団子の食材となった。  
最後に残った糟をスマと  
いって、牛や馬の飼料「か  
いば」にまぜて使った。

朝鮮ビエは、日照りに強  
く実をつけた。おかほ(陸  
種)は、穂の形はしている  
けど実がつかなかった。

山の手の家々では作って  
いたが、こうした雑穀はだ  
んだんと作らなくなった。

以上が、Mさんの話です。  
今度は、私が朝鮮ビエの種  
を入手した話です。

昨年五月に、西相模歴史  
研究会一行と群馬県にある  
法師温泉に行った時です。  
帰途に、永井宿(群馬県利根  
郡新治村)を見学した後、資  
料館に入りました。

陳列品の中に、朝鮮ビエ  
の穂数本が展示されていま  
した。「オー」と感動し、す  
ぐさま受付にいつて余分を  
聞きました。

「上の家(資料館上)で種播  
きをしたと言っていたの  
で、余分をお帰りまで聞い  
てあげます」

との親切さでした。  
帰り際「余分がある」話

をうけて、上の家に行きま  
した。庭先で仕事中の婦人  
から、この朝鮮ビエの種を  
授かりました。

感激でした。三百円で入  
手できた念願の種で、絶品  
のみやげとなりました。話  
に聞いていましたが、実物  
にふれたのは初めての自分  
でした。

この永井宿は、新潟県と  
の境にある三国山の麓にあ  
ります。山あいの村に、朝  
鮮ビエが息づいていました。  
絶妙の種つぎと思える、こ  
の地の営みでした。

早速に実家(久野)のみか  
ん畑の一隅に、朝鮮ビエを  
種播きました。これが稔  
り、Mさん訪問に持参した  
実物の穂となった次第です。

本年の収量は、来年度の  
種に保管します。来年には  
粉食を考えています。  
永井宿伝来の朝鮮ビエが、  
小田原の地へ、運よく種つぎ  
できました。

小田原地方で  
は、絶えて久  
しい朝鮮ビエ  
です。知るか  
ざりでは、昭  
和二十五年頃  
が最終と聞い

ております。約五十年ぶり  
に復活しました。

山地特有の作物で、特性  
ある粉食の朝鮮ビエでし  
た。貧しさを思う粉食の声  
は、一部の評です。特性が  
愛好された一面もありまし  
た。けれど、時勢にはじか  
れて社会淘汰されました。

他の在来作物、陸稲、麦  
類なども、同じ運命をたど  
りました。

これにそって、これらをつ  
くり育て、食べた経験者  
も減り続け、やがては皆無  
となること必定です。知る  
人がいる今が、聞きがきで  
きる最後の時期です。

今が最終の現象は、他の  
分野にも数多くあります。  
郷土で展開された先輩の体  
験を、書きとめておくこと  
も、現代史の課題かと思っ  
ました。この一例として、  
朝鮮ビエ物語をしたためた  
次第です。

朝鮮ビエ

小田原市舟原や南足柄市の  
地蔵堂は、いずれも山間部  
の農村であるが、ここでは、昭和初年ご  
ろまで、朝鮮ビエを栽培していた。朝鮮  
ビエは、大正年間(一九二二)の新しい品  
種で、おそらく個人的に、新品種を朝鮮  
などから持ってきたものであろう(県立  
農業総合研究所による)。

『日本民俗文化体系』14巻  
「技術と民俗」下巻  
(小学館刊)

城山方面を望む

(小田原城  
天守閣  
市民会館  
6Fより)



# 丹沢の植物

④

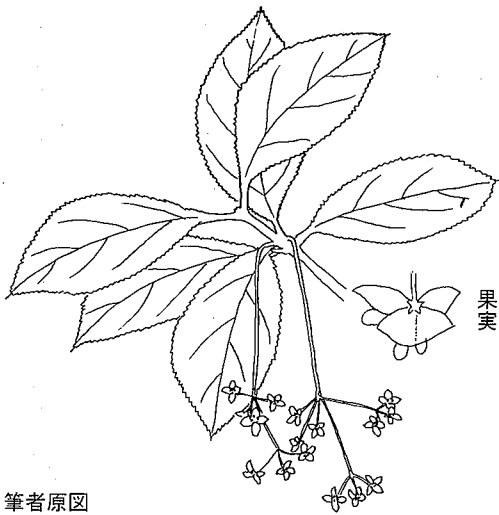
城川四郎きがわしろう

林を覆って茂っていた雑木林の葉が、風に誘われて一枚また一枚と枝を離れて、空に舞う。そんな里山の秋の風情を味わいながら散歩していると、ある低木の枝から長い柄を垂らして真っ赤な実を着け、その実が朱赤色の種子を着けたまま五つに裂けているのに出会うことがある。花も実も長い柄の先に垂れるのでその植物はツリバナという名を貰っている。丹沢の尾根

を歩くと、このツリバナに似ているがもつと葉が広く、果実が四つに裂けている低木に出会うことが珍しくない。それが今日、ご紹介するヒロハツリバナである。北海道、本州、四国の温帯域に広く分布する植物であるが神奈川県では丹沢にしか分布しないようである。箱根のブナ帯にあってもいいように思うが記録はない。初夏、葉のつけ根から十程ぐらいの花柄を垂ら

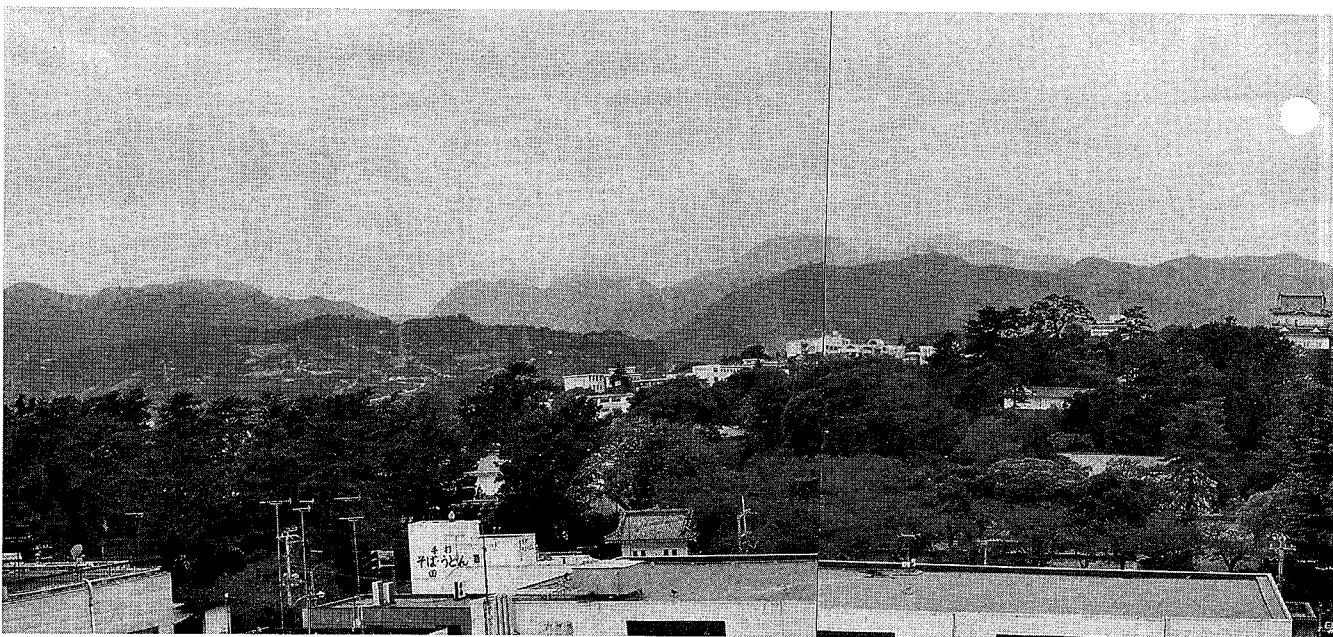
し、先が枝分かれして小さな花を咲かせる。花弁は四枚で黄緑色をしており、めだたない。植物に興味のある人でないと、花に気がつかず、通り過ぎてしまうだろう。しかし、秋に果実が赤く熟し、四つに裂けて朱赤色の種子を覗かせているのに出会ったら、きつと興味を覚えて、何という植物かしらと知りたくなるに違いない。しかし、実は、この植物がもつとも目立つのは早春である。五月初旬の丹沢の尾根は、ブナをはじめ、まだほとんどの樹木が葉を開いていない。そんな裸樹の多い樹木のなかで早々と柔らかな緑の葉を開いているのはヒロハツリバナぐらいである。だからその頃であれば遠くからでもその存在を一目で知ることができる。この仲間、よく人に知られているのはニシキギ、マユミ、マサキなどがあり、それらの花弁もヒロハツリバナと同じ四枚であるが、もつとも近縁と思われるツリバナなどは五枚であるのがどうも不思議でならない。

ヒロハツリバナ (にしきぎ科)  
*Euonymus macropterus*



筆者原図

（神奈川県植物誌調査会代表）  
元・神奈川県立高等学校校長



古文書講座 29

最乗寺道了尊と辻村甚八郎

内田 清

用材通路紛争を調停する

写真版は嘉永四年(一八五二)の差入申一札之事という古文書の後半部分である。この文書は関本村と飯沢村(共に南足柄市)が小田原から運ばれてきた道了宮と松平大和守御霊屋再建用材の通路を巡って争った事件について、小田原誠信講総代辻村甚八郎らが取まとめた調停(示談)確認書の後半である(「南足柄市史」8の「仲介願書」は誤認)。全文の要旨は左記のようになる。

- 1 飯沢村が、関本村回りの用材を作場道(農道)通過として差押さえた事件の訴訟中は、炭焼所村回り道と両道を通す事になった。
- 2 以後も飯沢村が、用材を差置くと御山(最乗寺)は、飯沢村民の落葉拾い等まで出入りを禁止した。
- 3 私たちは、飯沢村の作場道論や用材差置を心得違いとみるが、山内出入り禁止は気の毒なので、ひたすらお詫び申上げさせる。

4 再建に差支えるので、極楽寺と石方講中の総代として、小田原誠信講の私たちが立入り(調停)する事を任せて戴き有難い。

5 ついては飯沢村民を説得して、用材を工事場まで運ばせ、今後考え違いないように諭す。

6 この故に飯沢村民が前の様に入出りを許されたのは有難い。

(4以下が写真版と解説文部分)

この文書は最乗寺宛だが、同内容のものが関本・飯沢両村にも届けられ、当事者の確認を得て一件落着となったと考えられる。

最乗寺の帰属を巡る両村の争いは、享保期に「関本村最乗寺」と定まったが、今回は炭焼所・狩野村回り参詣道を公認させようとして嘉永二年に再燃し訴訟となった。矢倉沢村等三名主による調停不調の折、曾比屋甚八郎らが乗り出して三年振りに解決させたのである。甚八郎は「時の氏神」を見事に果たしたのだ。

廿八宿塔を建立する

元治元年(一八六二)小田原誠信講は

「最乗寺坂(坂)路埃碑」を建てた。埃碑は一里塚の立石のことだが、ここでは高野山参道に一丁毎に立てられている、五輪塔形式の地輪を長くして梵字や距離等を彫った町石を变形したもので廿八基ある。

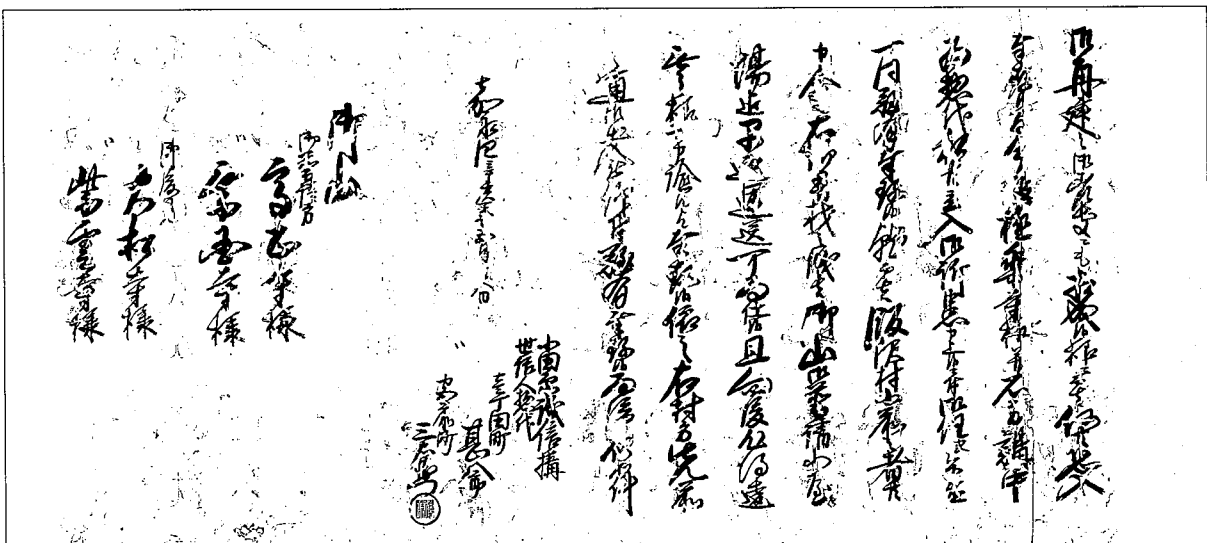
廿八丁目だけが灯籠形式で、辻村陳質(甚八郎)撰文の「最乗寺阪路埃碑記」(以下「埃碑記」と略称)が刻されている。

「埃碑記」からその特色をみると、第一は祭日の参詣者のために頭部を彫って灯籠としたこと。

第二は星座の所在や占いかかわる、廿八宿の文字を彫って廿八宿塔としたことである。これは「廿八宿の明德を景仰(敬う)し、分つて埃碑二十八基を書す。附会(こじつけ)の甚しきを笑うことなかられ。ああ童子遊戯砂をあつめて塔となすも成仏の(原)因となる。いわんや明燈を捧げ神徳を仰ぐ、あに種智(仏の知力)を證



廿六丁目塔(地上高一二三cm)



せざらんや。」(漢文の読み下し)とあ



るので、甚八郎の信仰と獨創性と豊かな教養の表出である。

現在の廿八宿塔の大部分が明治・

平成の再建で、元治の燈の残存は十一基である。建設費は誠信社中喜捨の淨財だが、「帳(ちりこ) 廿六丁目

壹丁目田村甚八郎」塔(写真)のように寄進者のわかる塔が五基ある。「軫(みつかけ) 廿八丁目」塔は、

現在常夜灯になっている。私は、甚八郎が廿八宿塔建立を、

天保の大火・嘉永の地震で壊滅した最乗寺が道了尊として再生する事業支援の象徴と考えていたと推測する。

曾比屋三代目甚八郎の実像は？

三代目甚八郎は『神奈川県史』人物編で無視された。中野敬次郎は『小田原近代百年史』で「同家では中興と言っている……長命を保った積小

為大の商家家であったが、また陰徳家とやかまし屋とで知られ、……店

御再建の御差支<sup>4</sup>も相成候様<sup>5</sup>而者、何共恐入奉<sup>6</sup>レ存候間、今般極樂寺様并石方講中

為<sup>7</sup>惣代<sup>8</sup>一私共立入、御訴患<sup>9</sup>申上候<sup>10</sup>二付、御任<sup>11</sup>被<sup>12</sup>下置<sup>13</sup>一同難<sup>14</sup>レ有奉<sup>15</sup>レ存候。就而者飯沢村小前者共申含、右御用材之義者、御山御普請小屋

場迄、早速運送可<sup>16</sup>レ爲<sup>17</sup>レ仕候。且向<sup>18</sup>後心得違無<sup>19</sup>レ之様可<sup>20</sup>二申論<sup>21</sup>一候<sup>22</sup>与奉<sup>23</sup>レ存候。依<sup>24</sup>レ之右村方先前之通御出入被<sup>25</sup>二仰付<sup>26</sup>一難<sup>27</sup>レ有奉<sup>28</sup>レ存候。為<sup>29</sup>二後日<sup>30</sup>一仍如<sup>31</sup>レ件。

小田原誠信搦<sup>32</sup>世話人物代

壹丁目町(曾比屋) 甚八郎(印)

同 宮前町(米屋・脇本陣) 三右衛門(印)

御山 御普請方 高興正寺様(茨城県石下町)

同 乗国寺様(茨城県結城市) 御後見 大松寺様(前是宿村)

同 柴雲寺様(平塚市岡崎) (最乗寺蔵)

の者たちは戦々恐々……明治初期における小田原の歌人の一人」家業を「呉服商」と書いている。

また内田哲夫は『小田原市史』資料編で表彰状等十数点を採用しながら「小田原藩の研究」で、曾比屋辻村家は、江戸時代「後期に質屋として進出し、この時期すでに小田原でも随一の商人としての地位を確保していたと思われる同家は、ふしぎな

ことに一丁目田村の名主以外に城下の町政運営にタッチしていた形跡はいまのところ認められない」同家が幕末から明治期へかけて小田原の経済・文化を語る際、欠くことの出来ない存在であった」としながら、甚八郎個人について論評していない。

しかし甚八郎は、『小田原市史』資料編近世IIIによると、元治元年(一八六〇)に「数拾年来(藩の)御金肝煎相勤」藩士並みの生涯五人扶持を、また宿老並・町年寄格・宿老等の名誉職も順次授けられ、大名貸しを絶たれた藩財政を千両・万両単位の献金・融資で支えている。

私は、彼が長い人生を商人、文人だけで終る筈がないと考える。事実『明治小田原町誌』は、明治三年(一八七〇)六月に「町年寄は参名なりしを」

「二人勤二仰出候付同僚辻村秩作御免候」と、家督を譲って小田原町政を担当していた、喜寿近い老甚八郎の辞任を記している。

号を陳質、隠居名を秩作と名乗つた甚八郎は、明治十五年(一八八二)十

一月十五日、法名涼心菴陳質寿翁居士と次の辞世を残して没した。

安春阿利と於もふ心能奈可理せ婆奈度可<sup>33</sup>以と波無花能夜<sup>34</sup>あらし

三代目甚八郎は研究されなければならぬ人物である。

注意してほしい語句

写真版古文書は虫穴、「塙碑記」は欠損の多い史料である。写真や拓本しかない場合、不明文字は空欄□として処理するが、史料解釈のために現物に当って丹念に確認すべきである。

A 寺の御普請小屋

こんばん、ごくらくじ様ならびに石かたこうちゆう

この度、極楽寺と石方講中。虫穴と数が重なるが、右方でも一心方でもない。石方の意味は真鶴村・岩村方面ということか。

B 寺の御普請小屋

もうしふくめ、みぎごようざいのぎ

申し含めて、再建の用材は。申合(相談)より文字の間合いもあり、意味的にも申含(説得)であろう。再建の御霊屋は徳川家康の孫で姫路城主、松平直基の墓のためのもの。

\*本稿は畏友小沢勇一氏の調査・拓本から多くの示唆を受けている。

# 震災日記

18

## 片岡永左衛門

大正十三年六月

十五日 晴

今日も史材に外出したるも得るものなし。夕刻石垣の件にて阿部氏に至る。

今日、呉服問屋の談話に依れば、昨今、各地共に不況にて夏物の売れ行きは震災以外の地方は特に甚だしく、何と云うも震災地は必要に迫られ売行き有るも、名古屋、大阪には破産に至る商人も有り。

十六日 晴

物価も今に下落とならざるも何と云うも工賃割高にて、石工四円参拾銭、大工参円七十銭、ブリキ四円、手助けの人足式円五十銭より七十銭、特に単独の雇入れを避けて請負工事に非ざれば殆ど来ざる有様なり。

十七日 晴

何と云うも震災は非常の打撃なれば、新年に入り幾分宛回復と思われしも、是も表面にて裏面は各自大苦痛の為、震災以来の不況に

て、先日、呉服商の連合売出しをなせしも不結果なりしと。

十八日 晴

銀行預金の引出しも昨年末にて一段落となりしに、追々に半永久の建築も着手の為、期限到来の分は多くは引出しとなり、遊館とは

十九日 晴

金も預金より出勝ちの傾向となり、当行本店も預かりの割二、三分は引出され、其の補充日本銀行に仰ぎしも苦痛に多少の差あるも□□。しかれ共、当行の如きは被害地としては上等の部なり。

二十一日 晴

昨日より暑気増す。済生会施料病院も弥々昨日閉院式となる。建物は小田原医会に引受け実費診療との計画有ると云うも実効

二十七日

に至るや否、此の済生会病院の為患者は幸福を得たるも、普通医は非常の打撃にて閉院にて一安心の処に又殆ど同様の事に賛成し得

ざるべし。

二十二日 晴

今朝、蓮上院に至り古文書借用、本誓寺に行く。古文書謄写中、東夫妻墓参に來たり妻君の詠歌を見せらる。先日、愛子を失い其の哀歌なり。初めての詠と云うも情意偽りなし。

二十三日 晴

今朝又地震。

二十四日 晴

史料も昨日にて打切る筈なりしも、今夕も新宿に至り行き山王口の件にて参考に福山金兵衛老人の談話を聞く。

二十五日 晴

午後、大谷津もと子告別に大久寺に行く。

六時半、親一大阪よりの帰途に止宿。

二十六日 半晴

二十七日

関重忠君、朝鮮よりの來画、中に大連時に関する鮮人慶七松施行文の一節有りしと持参して示さる。好意のこと。

二十八日 晴

三州瀬戸の人某訪ね來る。此の人按摩を業とし諸国の城跡の由来沿革を尋ぬると持参し薄冊に小田原城を自記して与う。嗜好も有るは有るもの、箱根手形一枚を与えしに大喜び。これは町役場の紹介にて來るなり。

二十九日 晴

午前、徳常院の金仏を見妙光寺の廢跡を見、午後は居神社の古碑(を)見る。今日は三度も外出、自ら笑う。

三十日 晴

七月一日

関氏年回に行き久翁寺に墓参。

二日

三日 半晴

欠勤 執筆。

四日 晴

牧野侍従三男病死し悔やみに行く。

五日 晴

六日 晴

蓮上院に書類返戻に持参横浜より提灯届き。

七日 晴

牧野に会葬。

途中、城堀の蓮葉を見て

ふり向けはあなすかすかし蓮すはの地震にや

□たる城の堀にも

八日 晴

盆提灯諸家に遣す。

靈前に提灯を手向むとて書す

ふたりしてよくそ来ませる祖父祖母もいさや遊はむ南無阿弥陀仏

姉妹手をとりにここにいと、その後より母上様にすがり打ち連れて、安齋町辺をあゆみ來るの眼前に浮かび感慨無量。

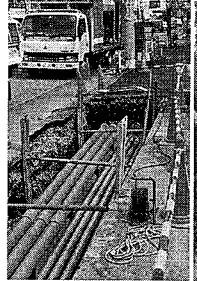
### 訂正

『小田原史談』一七九号二五六の「爽やかな話」の中で、曾我小学校とすべきところを、誤つて下曾我小学校としてしまいましたので訂正申し上げます。

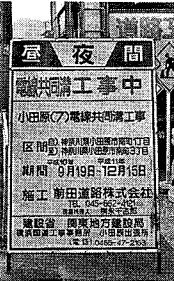
# 街さまざま



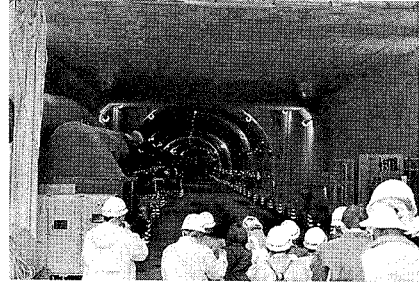
←小田原城跡本丸東堀復元



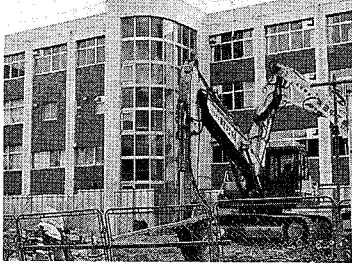
↑南町にて



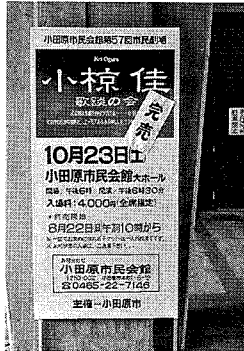
←電線埋設工事



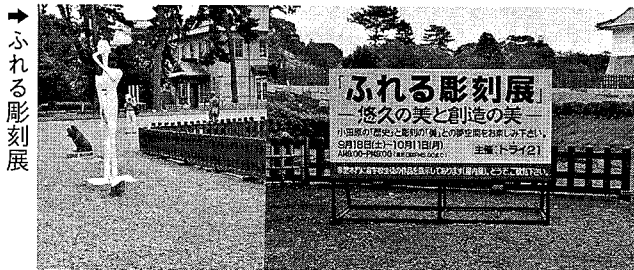
11/14 城山トンネル見学会↑



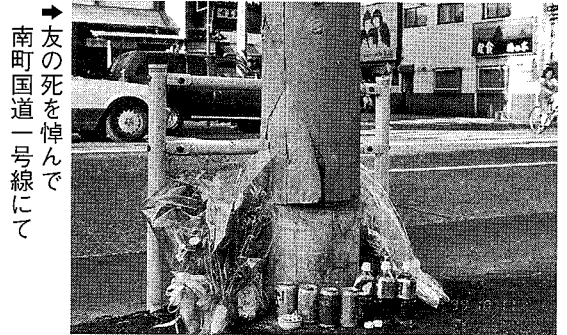
↑旭丘高校新築工事



→人気の音楽会→



→ふれる彫刻展



→友の死を悼んで  
南町国道一号线にて



←9/27 久野古墳祭



↑市史史料展

1999年(平成11年)11月6日 土曜日 天中

景況 県郡部も底打ち感

さがみ信金 前期より大幅改善

【さがみ信金】さがみ信金(株)は、11月5日発表した10月期の決算で、営業利益が前年同月比で1.5倍に増加した。これは、営業活動の改善によるもので、前期より大幅に改善した。また、営業活動の改善によるもので、前期より大幅に改善した。また、営業活動の改善によるもので、前期より大幅に改善した。

【景況】景況は、前期より大幅に改善した。これは、営業活動の改善によるもので、前期より大幅に改善した。また、営業活動の改善によるもので、前期より大幅に改善した。



→ある靴屋の閉店

地面に坐り込む女子高生



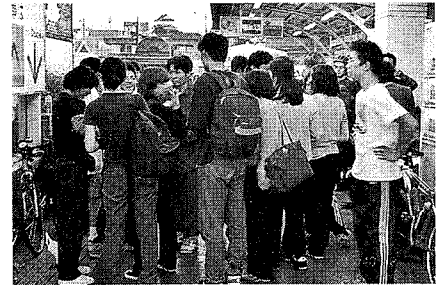
小田原駅前

茶髪・携帯・厚底ブーツ



小田原駅前にて

小田原駅にて



今日のサイクリングも終えて  
サークルの解散風景

# 若者たち

颯爽と



錦通りで



昼食を携えるOL  
弁財天通りで

## 郷土誌 文芸誌 目次紹介

### ◇西さがみ庶民史録

No.43 99・11・20  
B6 39ページ

#### 発行所

西さがみ庶民史録の会

小田原市飯泉二七六

〒316-0015

頒価 七〇〇円

・古い絵図を楽しむ  
英泉・美人東海道



小田原宿 岩崎 宗純

西さがみの詩華

播磨 晃一

巡礼街道をたどる

石綿 勉

小田原の天気

— 気象学的考察

磯崎 一郎

### ◇伊豆史談

発行 平成11年3月31日

— 弔辞(故長倉慶昌氏)

長倉慶昌さんを悼む

木村 博

今川氏真大平在城説を検証する

土屋比都司

伊豆佐野城跡考

土屋比都司

土屋比都司

### ◇時空 99・11 No.15

A5 92ページ

頒価 五百円

#### 発行人

鈴木一正

発行所 〒236-0016

横浜市金沢区谷津町

65-111011

鈴木一正

時空の会



### 訃報

和田次郎さん(小田原市小八幡一―一十三) 昨年十月十七日逝去されました。  
享年九十七歳

加藤正明さん(小田原市城山一―三二二) 昨年九月三十日逝去されました。  
享年六十八歳

ご冥福をお祈り致します。

#### 【評論】

眠れぬ夜の夢 遠野明子

#### 【座談会】

野球とエロス 大島エリ子

#### 【座談会】

批評の行く末

— 批評研究会をめぐって

井口 時男・菊田 均・

銚 秀実・富岡幸一郎

#### 【評論】

司馬遼太郎の言葉

菊田 均

#### 【書誌】

江藤淳参考文献目録

— 昭和五十四年 —

平成十年(上) —

鈴木一正

## 時 空

発行所	〒236-0016
編集者	鈴木一正
発行日	毎月15日
発行部数	1,000部
定価	500円
送料	別
印刷	印刷
発行所	〒236-0016
編集者	鈴木一正
発行日	毎月15日
発行部数	1,000部
定価	500円
送料	別
印刷	印刷

第15号

# 落穂集

◎今年は何処の秋山茶花も、咲き初めは花が小さかったが、盛りになると例年の大きさに戻ったようだ。気象の影響によるものであろうか各地の紅葉も遅れている。

◎この一月六日で満九十八歳になられた市川一郎さんは、曾我のことを書き続けていられるが、ワープロで打った原稿を届けてこられる。手があるえて字が旨く書けないからワープロを使うと云われるが、何時、覚えたかと尋ねると、八十歳代後半だとのこと。超人的

である。ともかく、我ら生涯学習の鑑である。

◎本会副会長の曾我保夫さん(小田原市相山)も今年満八十七歳になるが、矍鑠として活躍されている。自家の田圃を市民農園として開放している。毎土・日曜日毎に農作を楽しみにして遠くは横浜、鎌倉から来るとい

う。各人毎に栽培するものが異なるので、種子や苗の準備や栽培方法を教えるので、結構忙しいという。昨年十二月十九日には、小田原市立郷土文化館主催の「わらぞうりを作ろう」の体験学習会で講師として指導をしている。

◎『西さがみ庶民史録』No

## 賞鑑句

城門に羽音おさめし初鴉 大南テイ子

作者は小田原俳壇女流の第一人者。若くして御主人を戦争で亡くされ、女手で家業を守り苦勞された方で、俳句には大へんな意欲を持たれ、今は幸せな日々を送っていられる。

右の句、小田原の銅門の辺りであろうか鴉の姿が、「羽音おさめし」の言葉でしつかりと定着し、一読して初春の雰囲気が彷彿と湧いてくるのである。さすがに熟練されたきめ細かい作者の句といえよう。

(剣持芳枝)

43に載る石綿勉さんの「巡礼街道をたどる」は、巡礼街道についての詳しい記録は初めてであり、貴重な史料といえよう。

## 小田原史談会総会

### 史跡めぐり

◇三島・沼津方面を訪ねて

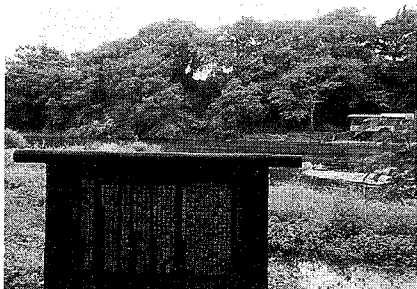
〔月日〕平成十一年九月二十九日(水) 晴 七時

〔日程〕山中城跡―黄瀬川対面石―興国寺城跡―柿田川湧水(昼食)―沼津御用邸

―葛山居館跡―千念寺―葛山城跡―小田原駅 四時五十分解散

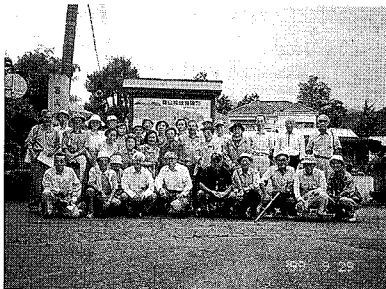
〔参加費〕四千円弁当持参〔参加者〕岡部忠夫、勝侯

柿田川にて



淳一郎、吉池清、高橋佐年、山口一夫、鈴木孝、佐宗正雄、相原俊夫、三橋国雄、朝倉忠雄、石黒栄治、湯川玲子、剣持芳枝、高田ヒデ、河合多美江、植田博之・尚美、向山重忠、譲原栄一、早野廣司・尊子、伏見弘、杉本剛氣、蛭間節子、内田美栄子、湯山浩二、藤沼キク子、小栗良英、栗原敏雄、青木良一 以上三十二名 (敬称略 順不同)

葛山城跡登り口にて



上州一の宮 貫前神社



妙義神社



◇上州・信州を尋ねて  
〔月日〕平成十一年十一月三日(水)―四日(木)  
〔日程〕三日 晴  
小田原駅前七時三十分―小田原厚木道路小田原北IC―厚木IC―東名高速道路―港

北IC―環八―練馬IC―関越道―高坂SA―藤岡IC―関孝和記念碑―多胡碑…(昼食)…多胡碑記念館―富岡製糸―貫前神社―妙義神社―ホ

特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店

小田原銀座 アオキ西廊

熱海 アオキクリニック

足柄香粧株式会社

飛鳥 魚屋

紳士服のアメリカヤ

(株)アルファ

伝統工芸 石川漆器(株)

税理士 石原和夫事務所

伊勢治書店

伊豆箱根トラベル小田原

画材 ガクブチ めうえ

かまぼこ

株式会社 小田原魚市場

小田原ガス

小田原市農業協同組合

小田原報徳自動車

株式会社 オートセンター・スギヤマ

オリオン座

かまぼこ 籠 清

鐘紡株式会社小田原工場

カネボウ化粧品鶴宮工場

神尾食品工業

木地挽 日下部産業

かみやま小児科クリニック

興電社

小伊勢屋

小国府津館

(有)小松石材店

さがみ信用金庫

崎村学院

趣味のこふく さくらい

正栄堂

小田原 友の会

辰寿堂スポーツ

大営不動産

邦とうぼん 小田原城趾前 田毎

網元直営 紋る海

スズニ宮

茶半家具株式会社

ちんぎょう本店

土谷建設株式会社

角田カクフ子店

東京電力(株)小田原営業所

株式会社 東華軒

トーホー建物

鳥かつ樓

和菓子 菜の花店

八小堂書店

八子マサ

平井書店

株式会社 報徳

建築金物(株)星崎仲吉商店

家庭金物 本多時計店

\* 町 松坂屋

学生専科 丸マルク

諸星運輸グループ

株式会社 美濃屋吉兵衛商店

曾我の梅干 美の政

みみづく幼稚園

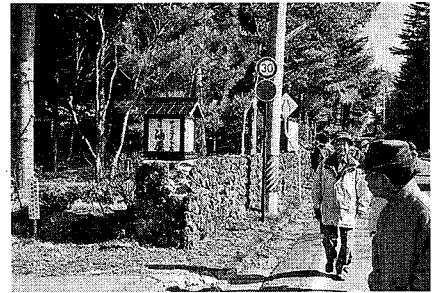
ヤオマサ株式会社

山口菓子舗

防災器具 優光社



中山道追分宿



北国街道海野宿



テル磯部ガーデン泊  
四日 半晴

ホテル八時出 碓氷関所跡  
―三笠ホテル(国重文)―沓  
掛宿:追分宿―小諸本陣跡  
(車中見学)―おぎのや(昼  
食)―海野宿:海野宿歴史  
民俗資料館―新和田峠ト  
ネル―諏訪下社―諏訪IC―  
中央道―大月IC―谷村PA―  
東富士五湖道路―御殿場IC  
―東名高速道路―大井松田  
IC―小田原駅前七時帰着

〔参加費〕二万八千五百円  
〔参加者〕岡部忠夫、山口  
一夫、勝俣淳一郎、剣持芳  
枝、湯川玲子、和田治助、  
吉池清、杉山竹二、早野光  
子、江口登百子、高田ヒデ、  
河合多美江 以上十二名  
(敬称略 順不同)  
紙面の都合により「小田  
原史談」紅蓮洞・坂本易  
徳は休載致します。  
・次号原稿締切は一月末。

小田原史談(年四回発行)

年会費 普通会員三千円